

# 貝殻集積の炭素14年代測定 から見た貝塚時代後期土器編年

## 貝塚時代後期土器の研究 (VII)

A Study of Pottery Chronology in the Late Shellmound Period  
with Absolute Dates from Radiocarbon Dates of Shells Found in Shell Deposit:  
A Study on the Late Shellmound Period Pottery VII

宮城弘樹

MIYAGI Hiroki

はじめに

- ① 貝塚時代後期土器の編年観
- ② 貝塚時代後期のこれまでの年代観
- ③ 年代測定された貝殻集積遺構の貝殻
- ④ 貝殻集積遺構と出土土器との関係の整理
- ⑤ 貝殻集積遺構と出土土器
- ⑥ 土器付着炭化物の年代測定資料

⑦ 考察

おわりに

### 【論文要旨】

本論は、弥生時代から古墳時代に並行する沖縄貝塚時代の貝殻集積遺構のゴホウラやイモガイの炭素14年代測定結果を受け、沖縄諸島の在地土器編年に絶対年代を付与することを目的に整理・分析を行った。

沖縄貝塚時代前期末の仲原式から同後期前半の阿波連浦下層式、浜屋原式、大当原式の4型式の土器が貝殻集積遺構とどのような関係で出土するのかについて整理を行った。

その結果良好な出土状況を中心に分析し、仲原式が紀元前8世紀～紀元前5世紀、阿波連浦下層式が紀元前5世紀～紀元前2世紀後半、浜屋原式がおおよそ紀元前2世紀後半～2世紀頃、そして大当原式がおおよそ2世紀頃～6・7世紀に製作消費されたと結論付けた。

【キーワード】 沖縄貝塚時代、貝殻集積、炭素14年代測定、沖縄諸島、仲原式土器、阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器、大当原式土器

## はじめに

沖縄の先史土器研究は、これまで本州の縄文・弥生時代土器編年との並行関係をとる、いわゆる交差年代法でその時期及び年代観が示されてきた。一方、近年の炭素14年代測定、特に土器付着炭化物を用いた精細かつ系統的な調査によって、日本列島における土器編年の年代観の整理が急速に進んでいる。沖縄の土器編年研究に対してもこの直接的に年代値を付与する方法が用いられ、幾つかの土器付着炭化物の年代測定が行われているが、年代的理解に資するデータが乏しいのが現状である。その最大の理由は、土器付着炭化物の検出の乏しさがあげられる。例えば、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）において平成16年度～平成20年度に実施された全国の土器付着炭化物を収集し年代測定を行った研究では、本地域の出土土器から付着炭化物そのものをほとんど得ることができず、期待したデータを得られなかった〔西本編2009〕。

2018年度に再び歴博を中心とする研究チームによって、比較的短時間に形成したとみられる貝殻集積を対象に、これを構成するゴホウラ、イモガイ等の貝殻の炭素14年代測定が行われ、年代のデータについては歴博によって既に一部公開されている〔藤尾・木下ほか2020〕。これらのデータは一部年代幅のあるものもあるもの、おおよそまとまっており、一括性の評価にしばしば疑問が呈される砂丘環境の出土土器について、貝殻集積の一括遺物及びその年代という新たな定点を得ることとなった。

本論では、上記の一連のプロジェクトのデータ提示を受けて、貝塚時代後期<sup>(1)</sup>、特に前半を対象に、これまでの土器付着炭化物等の既知のデータなどと併せ、貝殻集積の年代観を定点としながら、改めて本地域の在り土器各型式の年代観について整理することを目的とする。なお、本論は筆者が断続的に取り組む沖縄貝塚時代後期の研究シリーズの7本目の論考である。

## ①……………貝塚時代後期土器の編年観

貝塚時代後期はおおよそ弥生時代から奈良・平安時代に並行する時代と捉えられている〔伊藤1994、岸本ほか2000、新里2004〕。土器は前半と後半の2型式（様式）に分けられ、前半は無文尖底土器群を主体とし、しばしば九州や奄美諸島の弥生～古墳時代並行期の土器が伴伴する。後半はくびれ平底土器群が主体となり、開元通宝などとの伴伴関係から7世紀以降には既に存在し、後続するグスク時代との関係から11～12世紀には終焉を迎えたと考えられている〔宮城2014〕。

無文尖底土器群の整理は安座間〔2014〕に詳しい。無文尖底土器群は貝塚時代前期（縄文時代並行期）終末の仲原式土器から系譜的には追えるものと理解され、この仲原式土器にも弥生時代前期土器が伴伴することから貝塚時代前期終末期は一部弥生時代に並行すると考えられる。仲原式の次型式が阿波連浦下層式である。その後続型式とされるのは浜屋原式で、この浜屋原式はしばしば弥生中期の土器を伴うことから、これらが弥生時代前・中期の沖縄諸島を中心とする地域の在り土器と理解されている。さらに後続の大当原式へ型式変化し、大当原式は古墳時代まで存続すると考えられている。おおよそ3型式をそれぞれ新・古とする細別編年案が提示されている（図1）。なお、

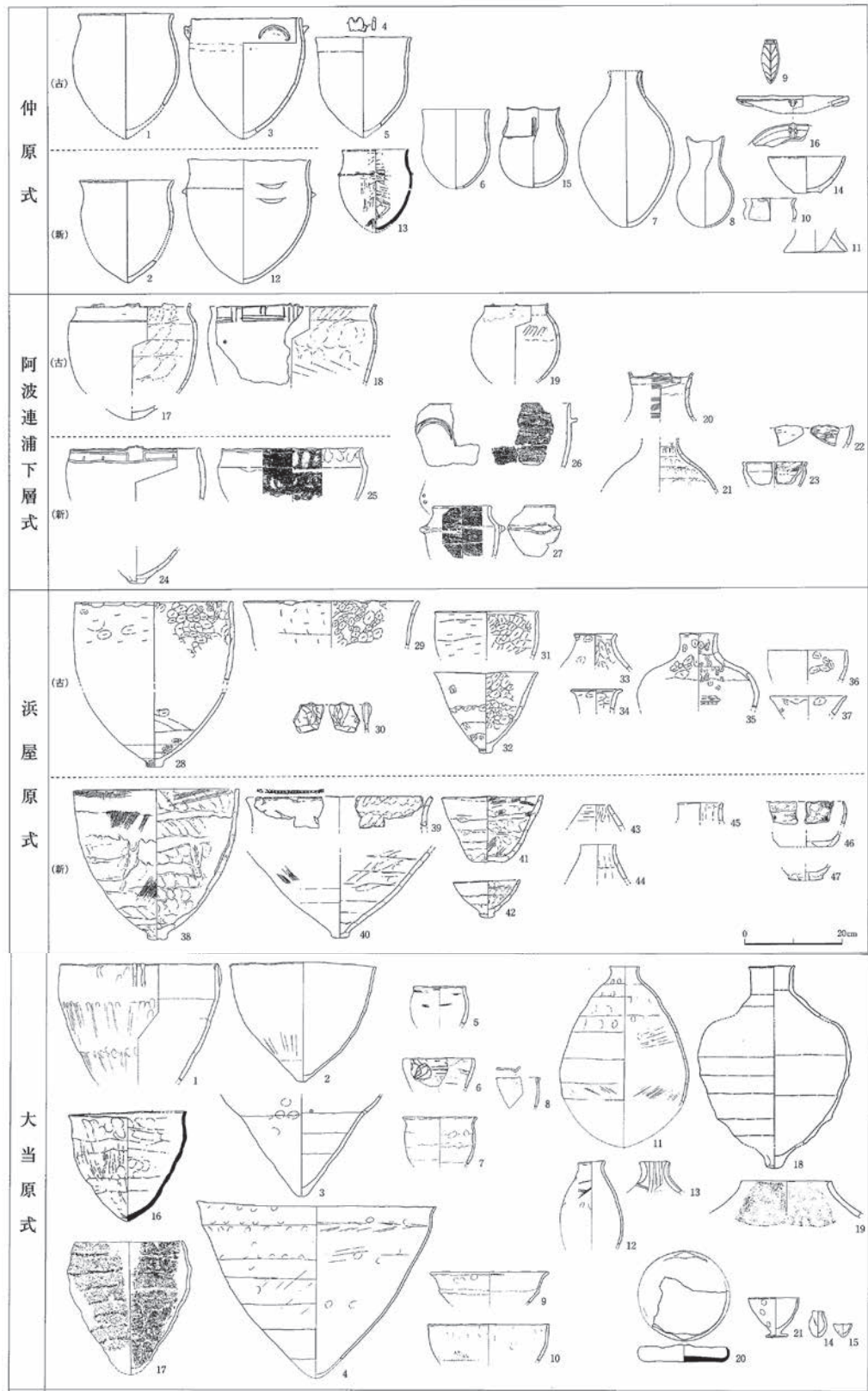


図1 沖縄貝塚時代後期の土器の編年(新里2004:部分)

沖縄諸島	北部九州	備前・備中	大阪平野中部	濃尾平野	東相模・南武蔵	仙台平野	渡島半島
仲原式	夜臼式	早期1 早期2 早期3 早期4	縄文晩期後半-1	西之山式	安行Ⅲd式 大洞C式(新)	大洞C式	大洞C式(古)
	板付Ⅰ式	前期Ⅰ		五貫森式	千綱式	大洞A式	聖山式
阿波連浦下層式	板付Ⅱ式	前期Ⅱ	前期-1 前期-2 前期-3	馬見塚式 貝殻山南式		境木式 堂山式(古)	大洞A式
		前期Ⅲ	西志賀式	堂山式(新)	大洞A式		(+)
		城ノ越式 須玖Ⅰ式(古) 須玖Ⅰ式(新)	中期Ⅰ	中期前半-1 中期前半-2 中期前半-3	朝日式 貝田町1・2式	十三塚東D式	十三塚東D式
浜屋原式	須玖Ⅱ式(古) 須玖Ⅱ式(新)	中期Ⅱ	中期後半-1	貝田町3式	平沢式 遊ヶ崎式 子の埴式	樹形式	二枚橋式 恵山Ⅰa式 恵山Ⅰb1式
	高三瀬式	中期Ⅲ	中期後半-2	高蔵式	宮ノ台式	(+)	恵山Ⅰb2式
大当原式	下大隈式	後期Ⅰ	後期-1 後期-2 後期-3	八王子古宮式 山中式		久ヶ原式/弥生町式	十三塚式 (下ノ内浦)
	西新式	後期Ⅱ 後期Ⅲ	終末期	廻間Ⅰ式	久ヶ原式/弥生町式		(上ノ原A) (+)
						赤穴式	後北C-D式

図2 広域編年表(佐藤編 2015)

全国的な弥生土器編年との並行関係については、図2のように説明されている。

## ②……………貝塚時代後期のこれまでの年代観

2008年筆者は、名島、安齋とともに琉球列島の炭素14年代測定の集成を行った[名島・安齋ほか2008]。その後、名島により再集成が行われ、新しい年代測定資料などが加えられている[名島2014]。本稿ではこれらを引用し、これまでの当該期の年代観について概略を示す。

阿波連浦貝塚では、阿波連浦下層式を主体とするⅥ層で2640～2380 yBP、浜屋原式の新段階を主体とするⅣ層で2060 ± 100 yBPの測定年代値が得られている。このほか、浜屋原式からアカジャンガー式を含む瀬底アンチの上貝塚イ-3区Ⅱ層で1680 ± 50 yBP(2σ cal AD 240～441(93.5%))、前原貝塚ではむ-34.7層で2330 ± 40 yBP(2σ cal BC 404～350(53.3%) cal BC 310～209(46.7%))、む-35南壁6層で1960 ± 40 yBP(2σ cal AD 3～183(95.1%))の年代値が確認されている。

その後、名島弥生によって再集成が行われ、追加資料などを加えて、大当原式については紀元前1～5世紀頃、くびれ平底系土器に移行していく時期は4世紀以降、7・8世紀頃と指摘されている[名島2014:248]。整理すると、阿波連浦下層式段階はおおよそ紀元前7世紀～4世紀頃、浜屋原式は紀元前1世紀前後、大当原式については5世紀頃までで7・8世紀頃にはくびれ平底系土器に移行していくと理解されており。おおよそ広域編年で示される九州以北の年代観とも整合するものの、細分編年と年代の絞り込みが課題となっている。

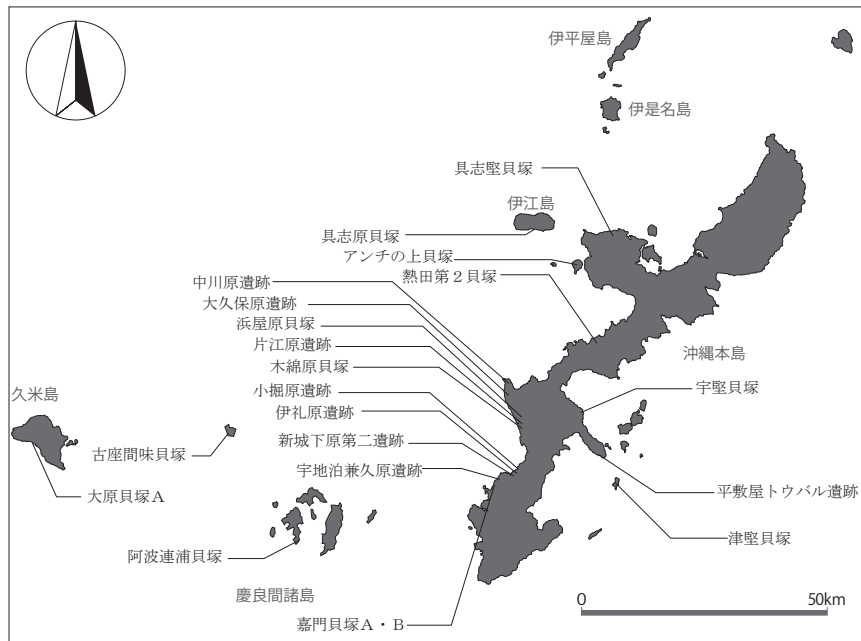


図3 遺跡位置図

### ③……………年代測定された貝殻集積遺構の貝殻

貝殻集積についての年代測定値は、歴博の研究報告〔藤尾・木下ほか2020〕によって詳述されている。これによれば、2018年度14遺跡の貝殻集積の貝（51点）の年代測定が行われ、人骨や獣骨（12点）、土器付着炭化物（1点）も併せて年代調査等が行われている。2019年度は13遺跡（29点）の年代測定が行われている。年代については4つの時期（紀元前6～紀元前5世紀／紀元前3世紀／紀元前1～1世紀、3～5世紀）に分けられており〔藤尾2020〕。更にこれを細分するA～Fの区分案〔木下2021〕<sup>(3)</sup>が示されている。後者の時期区分案を一覧表加え、提供を受けたデータを示した（表1）。

### ④……………貝殻集積遺構と出土土器との関係の整理

先に示した貝殻集積を年代の定点として用いるため、まず前提となる貝殻集積遺構とその周辺から出土する土器との関係について整理しておきたい。

貝殻集積遺構とその採集貝との関係は、生貝を先史時代人が海で採集した時点でほぼその貝殻の年代となる。即ち貝の調達年イコールと考えられる（貝殻の年代＝調達年）。しかし、しばしばゴホウラの死殻（貝が死んだ状態）が拾われ貝殻集積遺構に含まれていることが指摘されている〔黒住2011：96、ほか〕。この点では、①貝殻の年代＝貝の死んだ年代であり、②さらに貝が死んでから貝殻が採集されるまでの時間が考慮されなければならない。また、③採集期間と④貝殻集積使用期間が加算され、⑤貝殻集積の廃棄となる。私たちがこれを遺跡とし、⑥貝殻集積遺構と認定し発掘されるわけで、この点で測定された貝の年代に②③④の時間が加わり＝貝殻集積（⑤）遺構（⑥）

表1 貝集積の年代と土器型式

No	時期区分	遺跡名称	遺構名称	出土地区	層	歴博調査	較正年代 (cal/1σ)	対象土器	関係	出土土器	文献
①	A	嘉門貝塚 B	13号集積	す-25	IV層	2018	790-750BC	しすせ-24・25・26 (576m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	B・E	弥生土器, 阿波連浦新〜浜屋原古	松川ほか 1993
						2018	705-570BC				
						2018	535-425BC				
						2019	615-465BC				
						2019	510-410BC				
2019	455-380BC										
②	A	嘉門貝塚 A	1号集積	さ-19	IV層の下層	2018	620-475BC	さ-19(64m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	E	大当原式	松川ほか 1991
2018	490-400BC										
③	A	大原貝塚 A	SI01	VIトレンチ	III層	2019	745-625BC	SI01 出土土器	E	宇座浜・喜念 I・仲原式	當眞ほか 1980
④	B	熱田第2貝塚	ゴホウラ集積	A-12	III層	2019	495-395BC	A-12・11 出土土器, 報告書掲載分	E	仲原式	金武ほか 1979
⑤	B	小掘原遺跡	87KSS	L-12	VI層	2018	475-390BC	C区出土土器集計分, 報告書図示資料無し	E	大当原式	山城ほか 2012
						2018	465-385BC				
⑥	B	伊礼原遺跡 (砂丘区)	SS02 (上層)	T-20	V層(?)	2018	405-355BC	SS02に伴う取上番号 1498 ほか	B	阿波連浦, 浜屋原	東門ほか 2014
						2019	485-395BC				
						2019	460-380BC				
						2019	80BC-AD109				
⑦	B	伊礼原遺跡 (砂丘区)	SS03	T-20	V層(?)	2018	390-340BC	SS03に伴う取上番号 1457,1458 ほか	B	浜屋原式, SS01 弥生土器と同一個体か	東門ほか 2014
⑧	B	木綿原貝塚	イモガイ集積	墓石空白地帯の中央	第III層 黄褐色層	2018	450-375BC	調査区全体	IV V : C II : D III : E	仲原式, 浜屋原式	當眞ほか 1978
						2018	101-10BC				
						2019	85BC-AD5				
						2019	75BC-AD15				
						2019	45BC-AD35				
⑨	B	大久保原遺跡	8号集積	-	-	2019	465-380BC	-	-	-	読谷村教育委員会提供
2019	450-375BC										
⑩	B	阿波連浦貝塚	集積	ホ-14	VI層	2019	490-400BC	ホ-14(16m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	VI : E IV : D	VI層: 阿波連浦下層式 (古段階)。IV層: 浜屋原式	高宮ほか 1999
2019	440-360BC										
⑪	B	平敷屋トウバル	集積 1	3区 R-32	V下	2018	460-380BC	Q,R,S-31,32,33 (144m <sup>2</sup> ) 出土土器	E	-	鳥袋ほか 1996
⑫	B	平敷屋トウバル遺跡	貝殻集積	2区 I-9	-	2018	415-355BC	I-9(16m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	E	-	横尾ほか 2014
2018	410-355BC										
⑬	B	宇地泊兼久原遺跡	Mトレンチ	M-35	攪乱 (III)層	2019	395-345BC	M-26(4m <sup>2</sup> ) 出土土器	参考	阿波連浦下層 (新段階)	高宮ほか 1999
⑭	B	古座間味貝塚	第1号住居址	III地区	III層面	2019	385-305BC	A・ア-90・91 グリッド住居址, 貝溜り出土土器, 報告書掲載分	E	仲原式, 阿波連浦下層式	岸本ほか 1982
2019	295-150BC										
⑮	B	宇堅貝塚	集積	G-7	II層	2018	385-320BC	-	-	-	大城 1992
2018	380-300BC										
⑯	B	中川原貝塚 (2次)	1号集積	-	-	2018	235-135BC	-	-	-	仲宗根 1993
⑰	B	嘉門貝塚 B	8号集積	し-21	IV層	2018	250-145BC	さしす-20・21・22 (576m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	E	弥生土器, 大当原	松川ほか 1993
2018	115-25BC										
2018	100-10BC										
2018	70BC-AD20										
⑱	C	大久保原遺跡	2号集積	-	-	2018	200-115BC	2号集積に伴う取上 No.7	B	浜屋原式	読谷村教育委員会提供
⑲	C	片江原貝塚	2号集積	-	-	2018	230-130BC	-	-	-	仲宗根 1993
⑳	C	嘉門貝塚 A	2号集積	こ-18	IV層の下層	2018	220-130BC	こ-18(64m <sup>2</sup> ) 出土土器, 報告書掲載分	E	大当原式	松川ほか 1991
2018	200-115BC										
㉑	C	宇堅貝塚	第1集積	-	-	2018	195-105BC	-	-	-	大城 1992
2018	140-55BC										
㉒	D	片江原貝塚	4号集積	-	-	2018	115-30BC	-	-	-	仲宗根 1993
㉓	D	大久保原遺跡	10号集積	-	-	2018	115-25BC	10号集積に伴う取上 No.6	B	浜屋原式	読谷村教育委員会提供
㉔	D	平敷屋トウバル遺跡	イモガイ集積 2	5-6区 T-24	V層	2018	115-30BC	S,T,U-23,24,25 (144m <sup>2</sup> ) 出土土器	D	大当原か?	鳥袋ほか 1996
2018	105-15BC										
㉕	D	伊礼原遺跡 (砂丘区)	SS01	A-19・20	V層(?)	2018	95BC-1BC	SS01に伴う取上番号 1458 ほか	BorC	弥生土器	東門ほか 2014
						2018	60BC-AD25				
						2018	50BC-AD30				
						2019	35BC-AD50				
			SS01 (最下部)								

No	時期区分	遺跡名称	遺構名称	出土地区	層	歴博調査	較正年代 (cal/1σ)	対象土器	関係	出土土器	文献
26	D	具志堅貝塚	SH2	J-52	Ⅱ層下部	2019	60BC-AD30	J-52(16m <sup>2</sup> )Ⅱ層出土土器	E	浜屋原式, 弥生土器	岸本ほか 1986
27	D	新城下原第二遺跡	イモガイ集積1	川跡2	川底面=3層	2018	45BC-AD40	Ⅱ地区(614m <sup>2</sup> )出土土器, 掲載資料分	川2-2より上位層:D 川2-3:E Ⅳ:参考 ⅤⅥ層:C	浜屋原式主体	片桐ほか 2006
						2018	40BC-AD40				片桐ほか 2006
28	D	新城下原第二遺跡	イモガイ集積2	川跡2	川底面=3層	2018	75BC-AD15	Ⅱ地区(614m <sup>2</sup> )出土土器, 掲載資料分	川2-2より上位層:D 川2-3:E Ⅳ:参考 ⅤⅥ層:C	浜屋原式主体	片桐ほか 2006
						2018	40BC-AD40				片桐ほか 2006
29	D	平敷屋トウバル遺跡	イモガイ集積7	6区 Z-35	Ⅴ層	2018	55BC-AD25	Z-35(16m <sup>2</sup> )出土土器	DE	Ⅴ層:浜屋原,Ⅳ-Ⅱ層:大当原-アカジャンガー式,	鳥袋ほか 1996
30	D	片江原貝塚	12号集積	-	黄白砂層内に掘り込まれる	2018	10BC-AD70	褐色砂層	BorE	浜屋原式か?	仲宗根 1993
31	D	アンチの上貝塚	3号集積(上と下)	イ-2区	Ⅱ層下部	2019	AD10-85	イ-2区(16m <sup>2</sup> )出土土器, 報告書掲載分	E	阿波連浦下層, 浜屋原, 大当原アカジャンガー式	盛本ほか 2005
32	D	アンチの上貝塚	4号集積(上と下)	イ-2区	Ⅱ層下部	2019	AD20-95				
						2019	AD40-120				
33	E	具志原貝塚	2号集積(?)	西区	5層上面(?)	2018	AD275-365	-	-	-	安里ほか 1985
						2018	AD325-405				
						2018	AD345-410				
34	E	伊礼原D遺跡	SS4317	H17	Ⅴb層	2018	AD330-405	土坑内出土土器	B	大当原式の胴部片1点と報告	山城ほか 2013
35	E	浜屋原貝塚	ゴホウラ集積	-	-	2019	AD385-465	-	E	-	
36	E	津堅貝塚	6号集積No.2539	M-6	Ⅶ層	2018	AD335-410	M-6(100m <sup>2</sup> )出土土器, 報告書掲載分	E	大当原式	宮城ほか 2005
						2018	AD380-450				
						2018	AD390-465				
37	F	中川原貝塚(2次)	3号集積	-	-	2018	AD525-610	-	-	-	仲宗根 1993
38	F	アンチの上貝塚	2号集積	ウ-5区	Ⅱ層下部	2019	AD545-620	ウ-5区(16m <sup>2</sup> )出土土器, 報告書掲載分	E	阿波連浦下層, 浜屋原, 大当原アカジャンガー式	盛本ほか 2005

の関係となる。

調達された貝が生きていた貝を採集したものであれば①=貝殻集積に限りなく近く、死貝の採集が行われた場合は①+②=調達年となる。採貝が長年に及び同一箇所埋納を繰り返すなどが行われていた場合、貝殻集積の年代にバラつきが生じるものと想定される。実際に、1基の貝殻集積として回収された複数の貝殻の年代の開きが100年以上あるものも存在している(例えば木綿原遺跡)。

上記のように厳密に言えば、⑥遺構形成年≒①構成貝殻の年代になるものではないものの、その誤差は、現在の後期土器編年の各型式に想定されている時間幅が相対的に広いことを考えれば、年代付与する参考値としてほとんど考慮する必要の無い誤差の範囲と考えられる。但し、今後土器型式の細分が行われ、かつサンプル数が増加した時点では、上記の問題を考慮することが必要と考える。いずれにせよ、本論では本来配慮されるべきこの時間的問題を単純化し、ほとんど考慮せずに年代比定作業を行っていることを付言しておきたい。

一方、遺跡に埋没する土器は、おおよそ土器使用が途絶し、いわゆる廃棄された後土器の一部破片が出土し調査によって回収されたものである。このため、土器を貝殻集積の容器として使用するなどの明確な共伴事例でない限り、貝殻集積形成年と土器との関係を一律に扱うことは困難である。この点も、本論を進めていく上で前提となるものであり、少なくとも遺構形成年と土器破片との関係について、整理し準拠すべき枠組みを用意する必要がある。

土器破片資料と貝殻集積遺構との関係を以下のように整理する（図4）。

【A】土器の中に貝殻がある

貝殻集積の容器として土器が用いられるなど、土器の使用年代と貝殻の年代が明確に共伴すると確認される事例。但し、現時点で沖縄ではこのような事例は確認されていない<sup>(4)</sup>。

【B】集積に土器が伴う

遺構を覆う堆積層中に含まれる土器は、当該土器廃棄年とほぼ時間を共有していたと考えられる。例えば伊礼原遺跡のSS03（図14-c）の土器（図14-4）は、SS03の貝殻集積を被覆する堆積層中に含まれる土器である。この土器は貝殻集積形成年には登場し、これ以降存在した点で上限年代の参考とすることができる。

【C】貝殻集積に掘り込まれた層中に含まれる土器

掘り込まれた堆積層中の土器は、当該土器廃棄年の下限年の参考年として理解することが可能である。例えば新城下原第2遺跡のV層、VI層出土の土器は、イモガイ集積1、2の貝殻集積形成時には既に川が形成されており、その川に切られる形でV層以下の堆積層が検出されている。遺構下層の堆積層中に含まれている土器は貝殻集積形成年には廃棄されていたことは明らかであり、貝殻集積形成年以前に存在したと仮定することができる。

【D】貝殻集積を被覆する堆積層及びその上位層の中に含まれる土器

被覆する堆積層の土器は、当該土器廃棄年の上限年の参考年として理解することが可能である。ただし、遺構被覆の堆積層中に含まれているからといって、下層に存在した土器片が混在していないとは断言できないため、おおよそ貝殻集積形成年以前に存在していなかったと仮定される。

【E】堆積層中から貝殻集積遺構が検出され、その堆積層中に含まれる土器

堆積層中から遺構が検出されその層中に包蔵される土器と遺構の関係は、遺構形成後に当該包含層に廃棄されていた土器が埋没することもあり得るため、あくまでもおおよそ近い時間を共有した可能性があるという程度とならざるを得ない。

【参考】攪乱層出土例など遺構との共伴関係が明確でないものは参考とした。

以上、沖縄の後期遺跡の調査では、広域調査の場合、白砂層中に複数の土器型式が含まれることが多く、同一層に含まれる場合は、遺構との平面的な位置関係が近いほど上記条件の確度は高くなることが指摘されている〔高梨1993：176・岸本2006：154-155〕。無論、その前提としてあくまでも層中でこれらの土器が動いていないということが重要で、層中を動くなどの不安定性も指摘されているため、個別に検証されるべきことは言うまでもない。

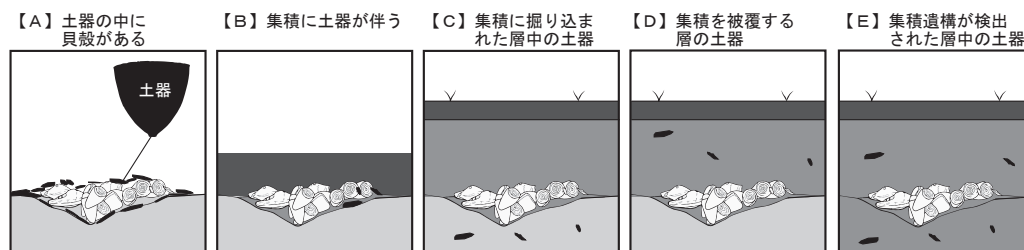


図4 貝殻集積遺構と出土土器との関係模式図



## ⑤……………貝殻集積遺構と出土土器

### 1) 大原貝塚 A〔③Ⅵトレンチ SH01〕

1979年に調査が行われた〔當眞・上原ほか1980〕。2m×10mの略東西に長いⅥトレンチのほぼ中央に、南北に連なる石列(SI01)が確認され、この南側に堆積する包含層(Ⅲ層)からゴホウラ集積が確認されている。調査所見では住居の可能性を指摘するも調査区外に広がることから、類推すると断っている。ゴホウラはSI01として注記されていることから、第Ⅲ層を住居跡内の覆土とも推測されている。このSI01出土土器として、9点が図示されている(図5-1~9)。1は宇佐浜式、2・3が喜念Ⅰ式、他は仲原式とみられる【E】。

### 2) 嘉門貝塚 A〔②1号集積〕〔②2号集積〕

1987年開発に伴う調査が行われた〔松川・下地ほか1991〕。隣接する同貝塚B区とは土器の出土状況が異なるとされる。報告では在地土器口縁部資料をⅠ~Ⅳ類に分類する。所見からおおよそⅠ類は大当原式、Ⅱ類はおおよそ浜屋原式だが大当原式を包摂、Ⅲ類は後期に一般的な資料群で大当原式からアカジャンガー式に該当、Ⅳ類は阿波連浦下層式~浜屋原式と目される。本調査で設定されたグリッドは1辺8mで1区画64m<sup>2</sup>を測る。

1号集積は、さ-19グリッド西隅で検出されている。さ-19で出土する土器は大当原式で粘土輪積みの継ぎ目が凹凸する(図5-10)。

2号集積もこれに隣接し、こ-18グリッドで検出され2つの貝集積の直線距離は約10mと隣接する。図化資料のうち両遺構検出グリッドのさ-19、こ-18グリッドの土器を抽出した、小片ながら特徴から大当原式比定されると考えられる(図5-11~15)【E】。

主体となる遺物は小破片のため時期判断判断しがたいものもあるが、掲載土器以外の集計された資料も、1号・2号集積ともにⅠ類(大当原式)で占め、前者が57%、後者が82%といずれも主体となる<sup>(5)</sup>。

### 3) 熱田第2貝塚〔④ゴホウラ集積〕

1978年に調査が行われた〔金武・盛本ほか1979〕。隣接するグスク時代初期の遺跡として知られる熱田貝塚は海側にあり、本貝塚は内陸側に立地する。報告では無文土器を貝塚時代前期末(縄文時代晩期相当)のカヤウチバンタ式、宇佐浜式及び型式不明土器に分類し、型式不明土器が本遺跡では主体となる。本調査ではいくつかの試掘トレンチが設定される。集積が検出されたのはA-12(1m×2m)第Ⅲ層である。図化資料が少ないため、本地区およびA-11から出土した土器を抽出した。図5-16は仲原式段階の皿形土器の脚台<sup>(6)</sup>、同-17は無文の小型鉢が出土している【Eか】。

### 4) 古座間味貝塚〔⑭第1号住居址〕

1980年に土地改良に先立ち範囲確認調査として実施された〔金武・岸本ほか1981、岸本・鳥袋ほか1982〕。出土位置については1981年1次調査の報告に記載されており、この報告書に掲載されて

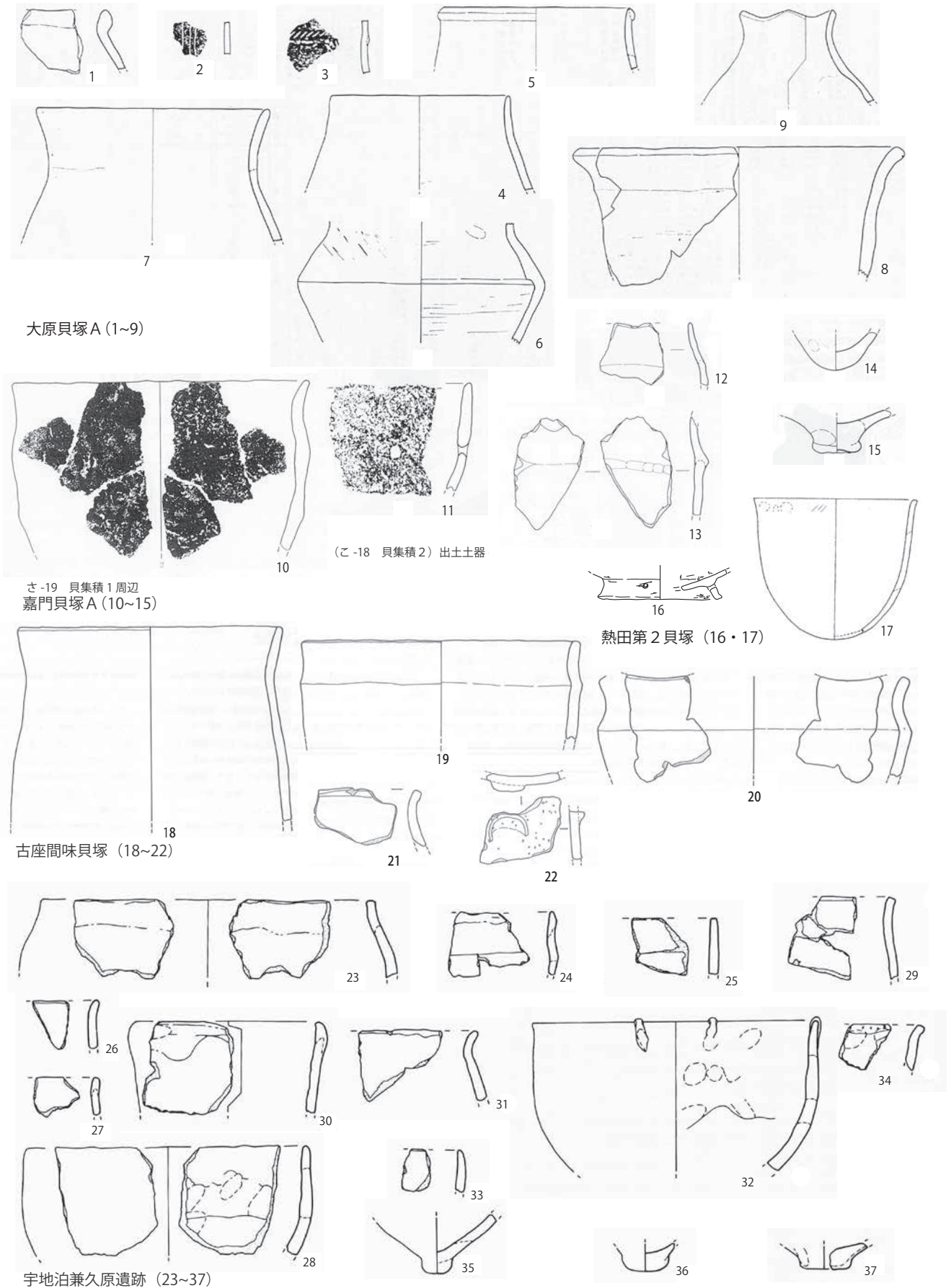


図5 大原貝塚A・嘉門貝塚A・熱田第2貝塚・古座間味貝塚・宇地泊兼久原遺跡出土土器 (S=1/4)

いる住居址内の出土資料5点を示す(図5-18~22)。18は仲原式, 19~21は特徴から阿波連浦下層式と目される。22は耳の付された胴部片で型式は胎土等の特徴から仲原式と推定される【E】。

### 5) 宇地泊兼久原遺跡【⑬集積】

1984~1985年に学術調査として発掘されている[高宮ほか1989]。M-26(2m×2m)出土ゴホウラの年代測定が行われていることから, 本論では同グリッド出土土器を紹介するが, グリッドは攪乱とされていることから, あくまでも参考となる。図5-23~37はやや幅をもたせ阿波連浦下層式の新段階から浜屋原式と考えられ, 前者が主体となる【参考】。

### 6) 嘉門貝塚B【①13号集積】【⑰8号集積】

1988年開発に伴い調査が行われた[松川・下地ほか1993]。隣接する同貝塚A区とは土器の出土状況が異なり, 報告では在地土器口縁部資料を前項嘉門貝塚Aと同様I~IV類の4分類する。また, 搬入土器として弥生土器及び楽浪系土器とされる土器が出土する[下地1999]。本調査で設定されたグリッドは1辺8mで1区画64m<sup>2</sup>を測る。

貝集積13は, す-25(サブグリッドf)IV層で検出される。遺構平面図には土器が2点図化(図7-a)されているが, 収蔵されている土器から本土器の特定はできなかった。図化資料からす-25グリッド及びこれに接する周囲8グリッド(し-24・25・26, す-24・26, せ-24・25・26)を対象に, 出土する土器を21点抽出した(図7)。1は弥生土器, 2~8は阿波連浦下層式, 10~15は浜屋原式と調査時の報告分類IV類を主体とするとの所見と整合的である。ただし, 9は報告書IV類に分類されており阿波連浦下層式として扱われているものではあるが, 胎土や付された耳の形等から仲原式の可能性がある資料として紹介しておく。出土層不明やI層の資料も含まれるが基本的には, IV層で出土する資料となる【E】。

貝集積8は, し-21(サブグリッドa)IV層で検出されている。土坑内から土器の出土があるかについては確認することができなかった。図化資料からし-21グリッド及びこれに接する周囲8グリッド(さ-20・21・22, し-20・22, す-20・21・22)出土の土器28点を抽出した(図8)。出土した資料は, 報告分類I類(大当原式)でほぼ構成されている。1は搬入の弥生土器で中期の壺肩

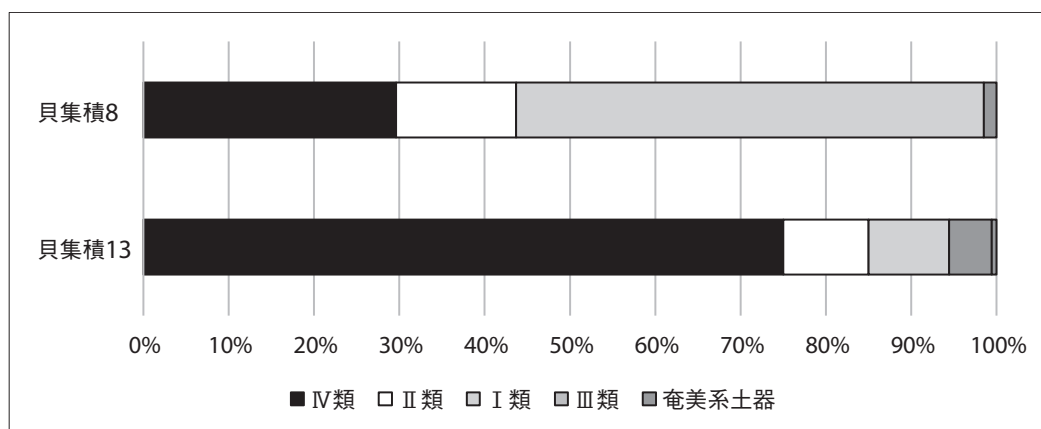


図6 嘉門貝塚B出土土器の比率(口縁部)

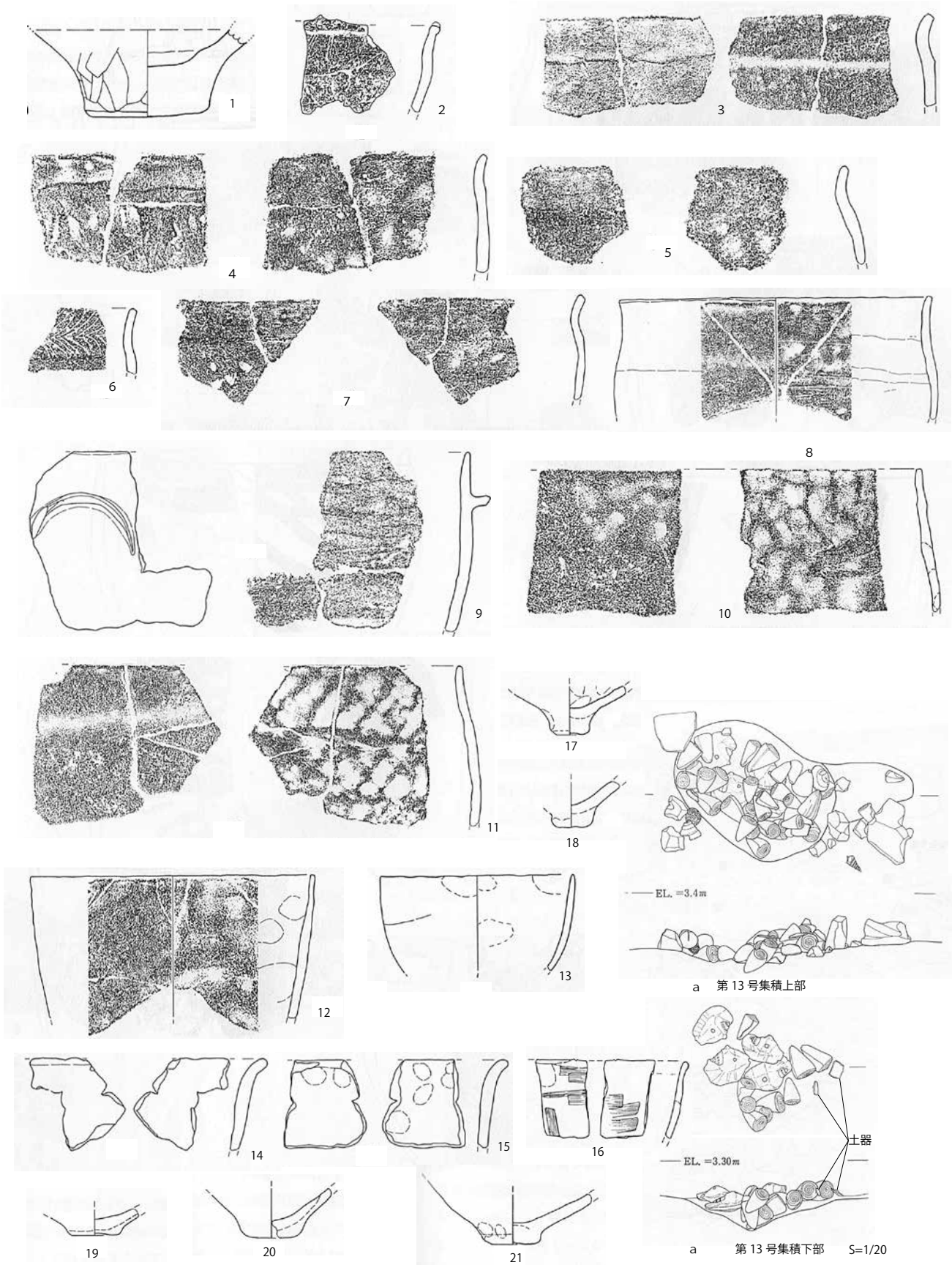


図7 嘉門貝塚集積13号(す-25)周辺出土土器(S=1/4)

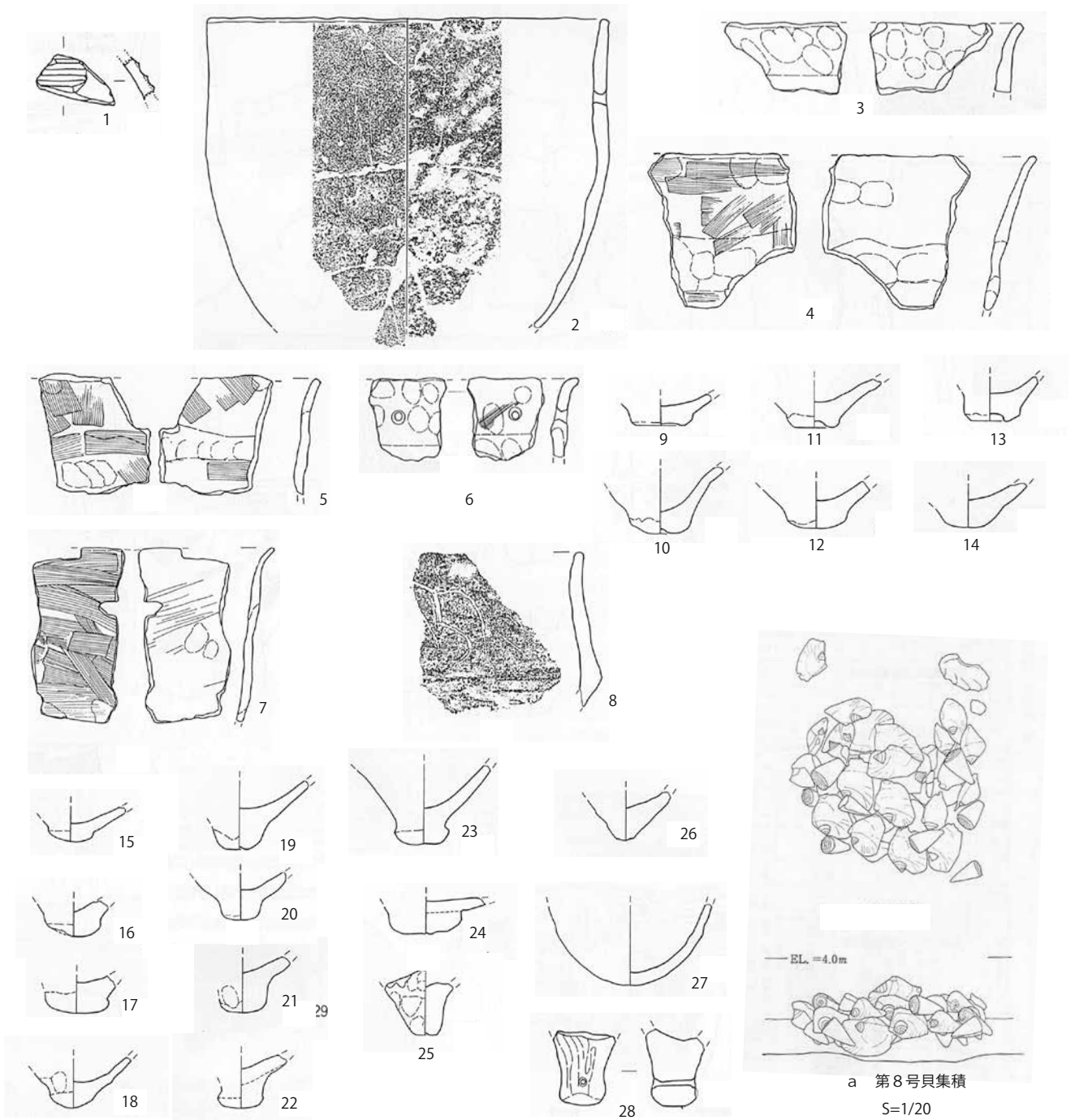


図8 嘉門貝塚B 貝殻集積8号 (L-21) 周辺出土土器 (S=1/4)

部の多条凸帯資料，2は浜屋原式で本資料は，す-21，22からの出土で，対象範囲の中でも北側で先に挙げた貝集積13側からの検出となっている。3～8はいずれも粘土接合部が器表面に凹凸する特徴をもち，いわゆる大当原式に該当する【E】。

なお，掲載土器以外の集計された資料をみていくと，貝集積13がIV類<sup>(5)</sup>(阿波連浦下層式，浜屋原式に相当)で75%を占めるのに対し，貝集積8ではI類(大当原式)55%と平面分布から土器型式の構成の相違を指摘することができる(図6)。

## 7) 小掘原遺跡〔⑤ 87KSS〕

2005～2009年に調査が行われた（山城・東門ほか2012）。本調査で設定されたグリッドは1辺10mで1区画100m<sup>2</sup>を測る。貝殻集積87KSSはL-12グリッドVI層から検出されている。遺構検出地区のL-12VI層出土土器の掲載資料は無いが、集計表には大当原（厚）の出土が報告されている。L-12は地区分類ではc区と評価され、c区は大当原式が主体とされる。図示資料が無いが、集計表から本地区の主体土器は大当原式土器とされる【E】。

## 8) 阿波連浦貝塚〔⑩集積〕

1986～87年に調査が行われた〔高宮・中村ほか1999〕。調査では4×4mのグリッド5カ所を対象に行われ、このうち集積が検出されたのはホ-14第VI層である。ホ-14で出土した土器を図化資料から抽出する（図9）。調査区の基本層序はI～VIII層までに分層され、基本的にはVI層までの発掘となっている。IV層とVI層が混貝砂層で、土器を大量に包蔵する。ゴホウラの貝殻集積が検出されたのはVI層からである。

VI層出土土器は阿波連浦下層式の標式資料で、沖縄諸島の貝塚時代後期初頭に位置付けられ、弥生時代前期後半頃から中期前半に並行すると評価される〔新里2015〕。VI層からは、5～10の阿波連浦下層式古段階資料が出土する【E】。

IV層は年代測定が行われた貝殻集積遺構の検出されたVI層の上位層となる。1～4が出土土器でいわゆる浜屋原式の特徴を持つが泥質胎土である点が典型的資料とはやや異なる【D】。

## 9) 平敷屋トウバル〔⑪集積1〕〔⑫集積2〕〔⑬集積7〕

1992～1993年に開発に伴って6,000m<sup>2</sup>の面積が発掘されている〔島袋・金城1996〕。IV・V層は、阿波連浦下層式や浜屋原式など前代の土器も含まれるものの、総じて大当原式土器が目立つ（図10）。

集積1は3区、R-32V層下から検出される。同グリッド出土資料は1点図示されている。1は大当原式新段階からアカジャンガー式と目されるが口唇の刻みなどから前者と推定する【不詳】。

集積2は5-6区、T-24V層下から検出される。同グリッド出土資料は、いわゆる後期土器が出土するものの、報告書掲載資料に該当するグリッドの出土資料は2点掲載されている。2は大当原式新段階、3は報告ではⅢ群2類のいわゆる弥生系土器に分類する。胎土は砂質で浜屋原式の胎土に類するが底部として図示されているが、底部ではなく口縁の可能性もある。小片のため判断は保留する【D・E】。

集積7は6地区、Z-35V層で検出される。同グリッドV層では5の浜屋原式深鉢形が出土。同層出土の7の壺も、胎土等から浜屋原式になると推量される<sup>(7)</sup>【E】。6・10・15はIV層出土（6はII層と接合）する。6は口縁を逆L字に折り曲げる資料で外面はやや平滑で浜屋原式に分類されると判断した。15は厚みのある平底でスセン當式の底部と推定される。10は小片のため不明だが大当原式からアカジャンガー式と目される【D】。II層は13が図示された資料で、大当原式からアカジャンガー式【D】。他は層不明の遺物ながら大当原式が多い【参考】

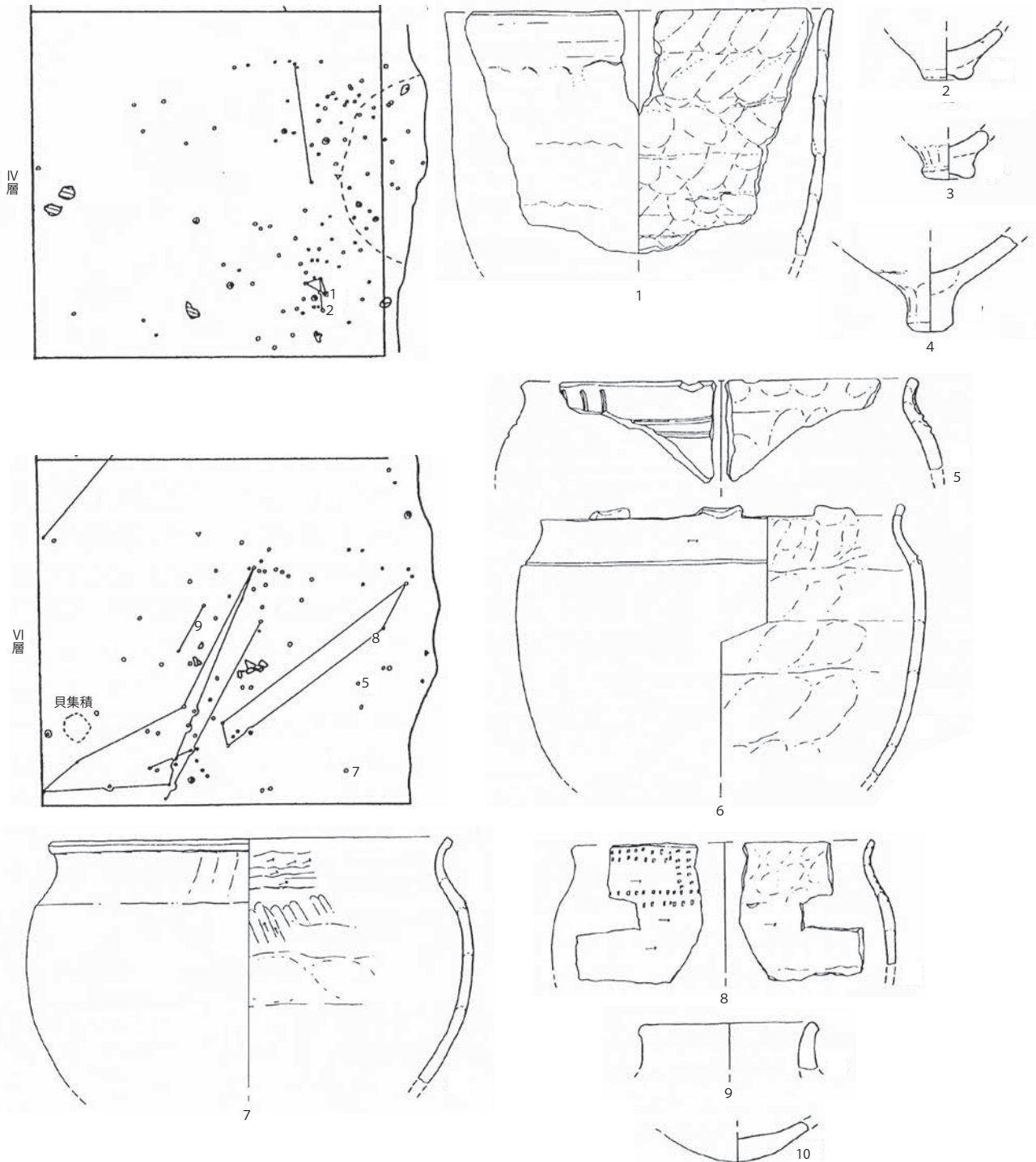
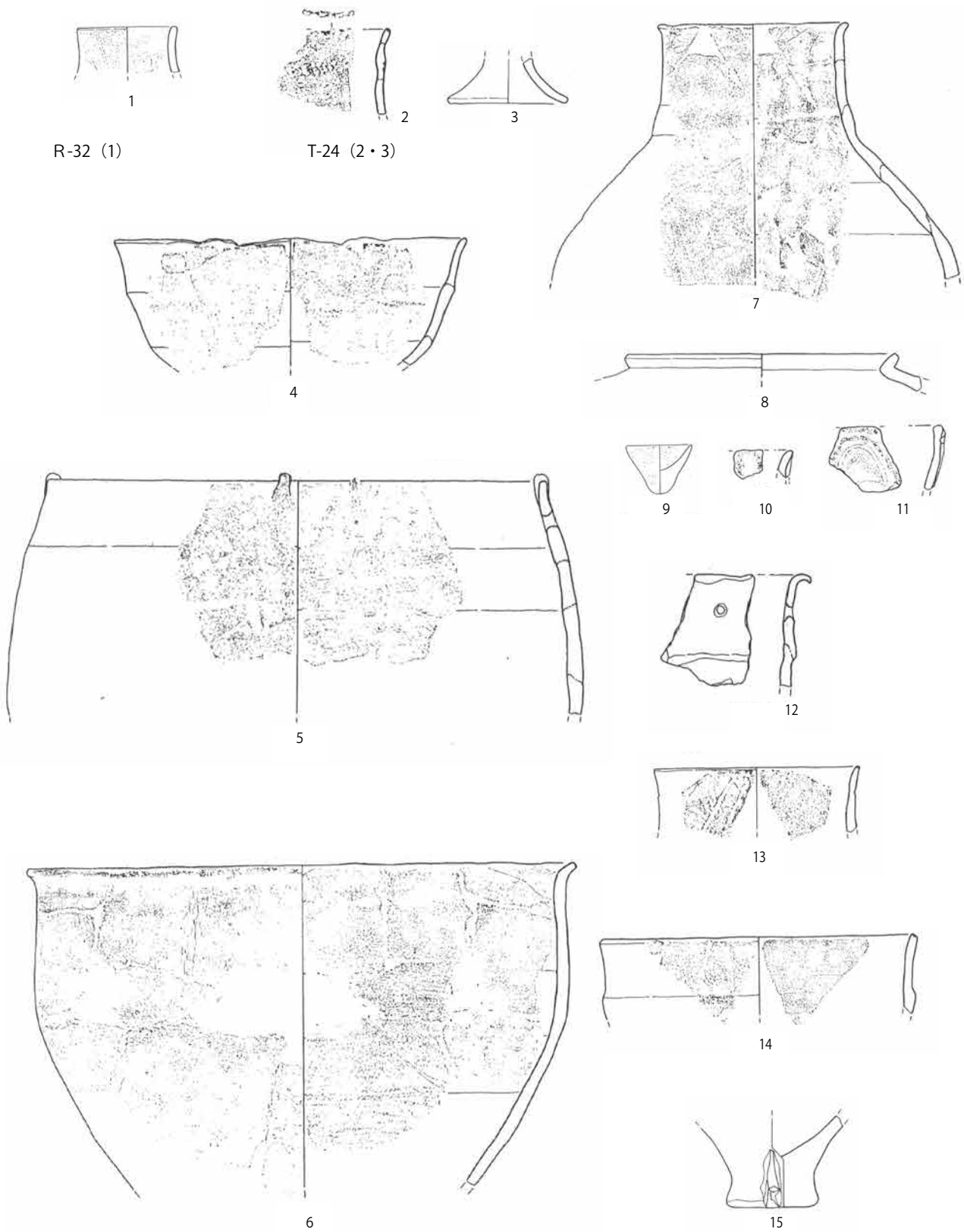


図9 阿波連浦貝塚(ホ-14)出土土器(S=1/4)  
1~4: IV層, 5~10: VI層  
3, 4, 10 同グリッド同層畔出土



R-32 (1)

T-24 (2・3)

Z-35 (4~15)

V層：5・7 IV層 10・15 IV+II層：6 II層：9・13 層不明：4・8・11・12・14

図10 平敷屋トウバル遺跡出土土器 (S=1/4)



## 10) 平敷屋トウバル遺跡〔⑫貝殻集積〕

2010年に開発に伴って1,902 m<sup>2</sup>を対象範囲として発掘調査されている〔横尾・太田2014〕。ゴホウラ集積がI-9で検出されている。遺物は土器全てのドットマップが作成されているが、遺物との関係を報告書から確認できないため検討を保留した。

## 11) 大久保原遺跡〔⑨8号集積〕〔⑩2号集積〕〔⑬10号集積〕

1987～1991年にリゾート開発に伴い発掘調査が行われた〔仲宗根1993〕。本遺跡は未報告の資料であるが、貝殻集積とともに図化され、回収された資料について、読谷村教育委員会の資料提供<sup>(8)</sup>を受け紹介する(図11-1・2)。

8号貝集積に伴う資料については確認することができなかつたため紹介を割愛する。

2号貝集積(図11-b)では、胴部片が貝殻集積直近から収集されている。2は胴部片だが、いわゆる砂質胎土で内面は指頭痕がナデ消されずに、外面は平滑で丁寧にナデ調整される。口縁を欠くため型式の特定は難しいが、阿波連浦下層から浜屋原式と考えられ、胎土色調から後者の可能性が高いと推定される【B】。

10号貝集積(図11-a)からは口縁片が貝集積の貝殻とともに図化され回収されている。1は典型的な浜屋原式の口縁部資料と考えられ、口縁部も平坦で均整のとれた器形となる【B】。

## 12) 具志堅貝塚〔⑫SH2〕

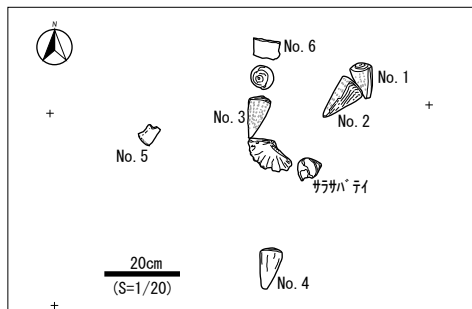
1983・84年に発掘調査が行われる。多くの弥生土器が出土し注目される〔岸本・鳥袋ほか1986〕。I地区南東隅のJ-52グリッドでSH2と呼称される貝殻集積が検出されている。本貝殻集積検出面では他に柱穴、炉跡や土坑などが検出され、検出面回収の遺物を床着資料として報告、これを被覆するII層、その上位の表土I層の層順となる。

図11-3～18はII地区床着資料である。床着資料として回収された土器は総数216点を数えこのうち46点(21.3%)が弥生土器とされる。3～6は弥生土器、7～11は浜屋原式、12～18は後期土器として報告されている【E】。本報告の後期土器は、大当原式、アカジャンガー式を含むが泥質胎土の浜屋原式が主体となると推量される。

図11-19～37は貝殻集積が検出されたJ-52 II層出土資料である。37はI層出土資料である。27～29は典型的な浜屋原式と報告書では分類されているもので、30～33が弥生土器、他の資料(19～26・34～37)は報告では後期土器として包括的に分類されている【D】。

## 13) 木綿原遺跡〔⑧イモガイ集積〕

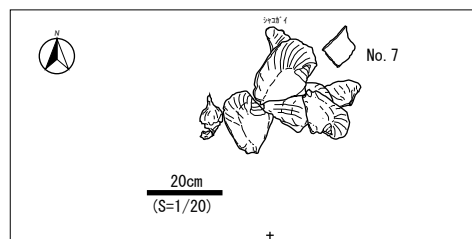
1977年に発掘調査が実施され、箱式石棺墓とともに弥生土器が出土する〔當眞・上原1978〕。報告書で第Ⅲ類とした土器は浜屋原式土器に類似し、I地区Ⅲ層で主体的に出土する。第Ⅱ類Cはいわゆる仲原式(報告天久A式)に該当すると考えられ、出土数こそ少ないものの石棺墓との共伴例が確認されている。貝集積と土器との関係について扱う本論で対象とする土器はやや範囲が広がる。報告書掲載資料を参考に転載する(図12)。IV層より下は貝塚時代前期(縄文時代並行)に相当する土器がみられる【C】。Ⅲ層より仲原式を主とし浜屋原式と目される資料が出土【E】。



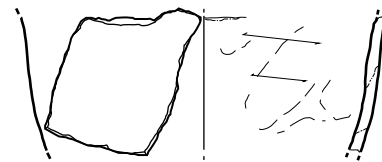
a 第10号集積



1 第10号貝殻集積出土土器（取上NO.6）

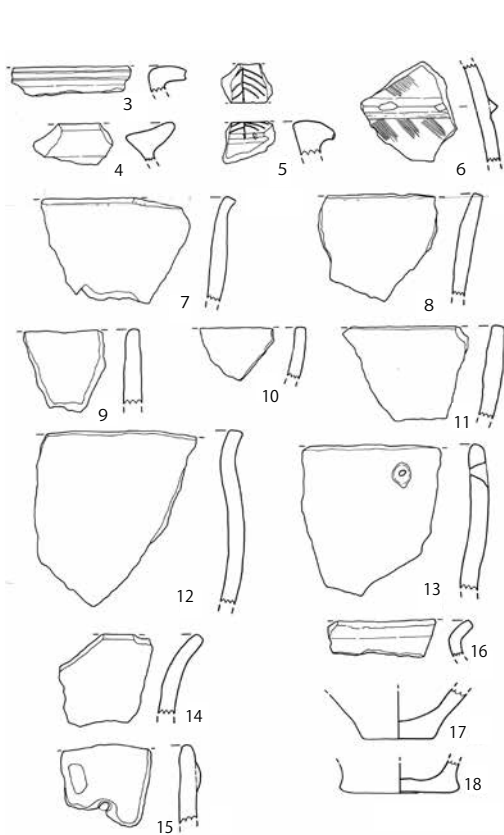


b 第2号貝殻集積



2 第2号貝殻集積出土土器（取上NO.7）

大久保原貝塚（1・2）



具志堅貝塚（3~37）

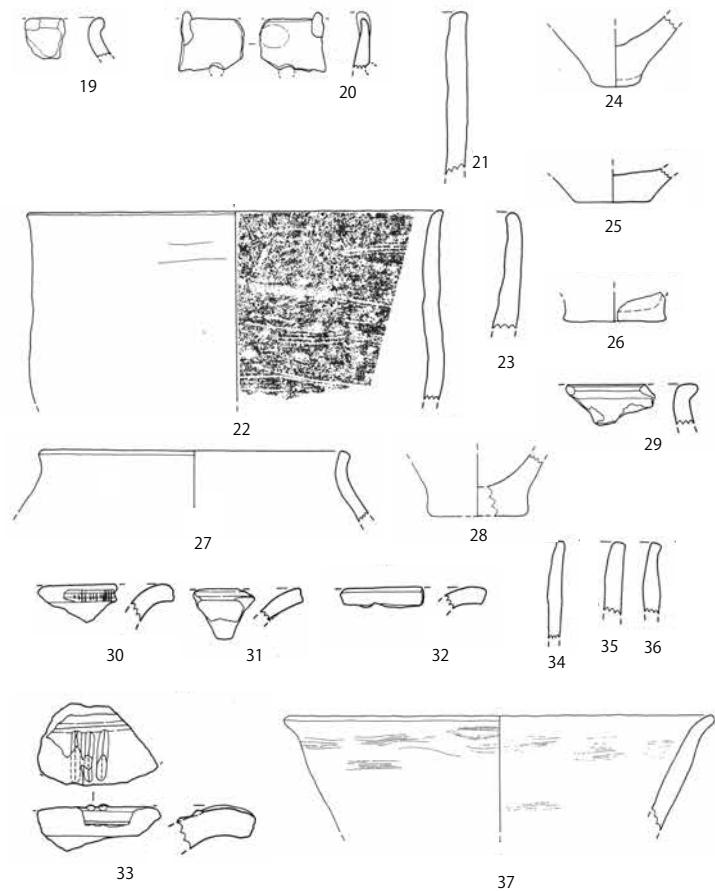


図11 大久保原遺跡・具志堅貝塚出土土器 (S=1/4)

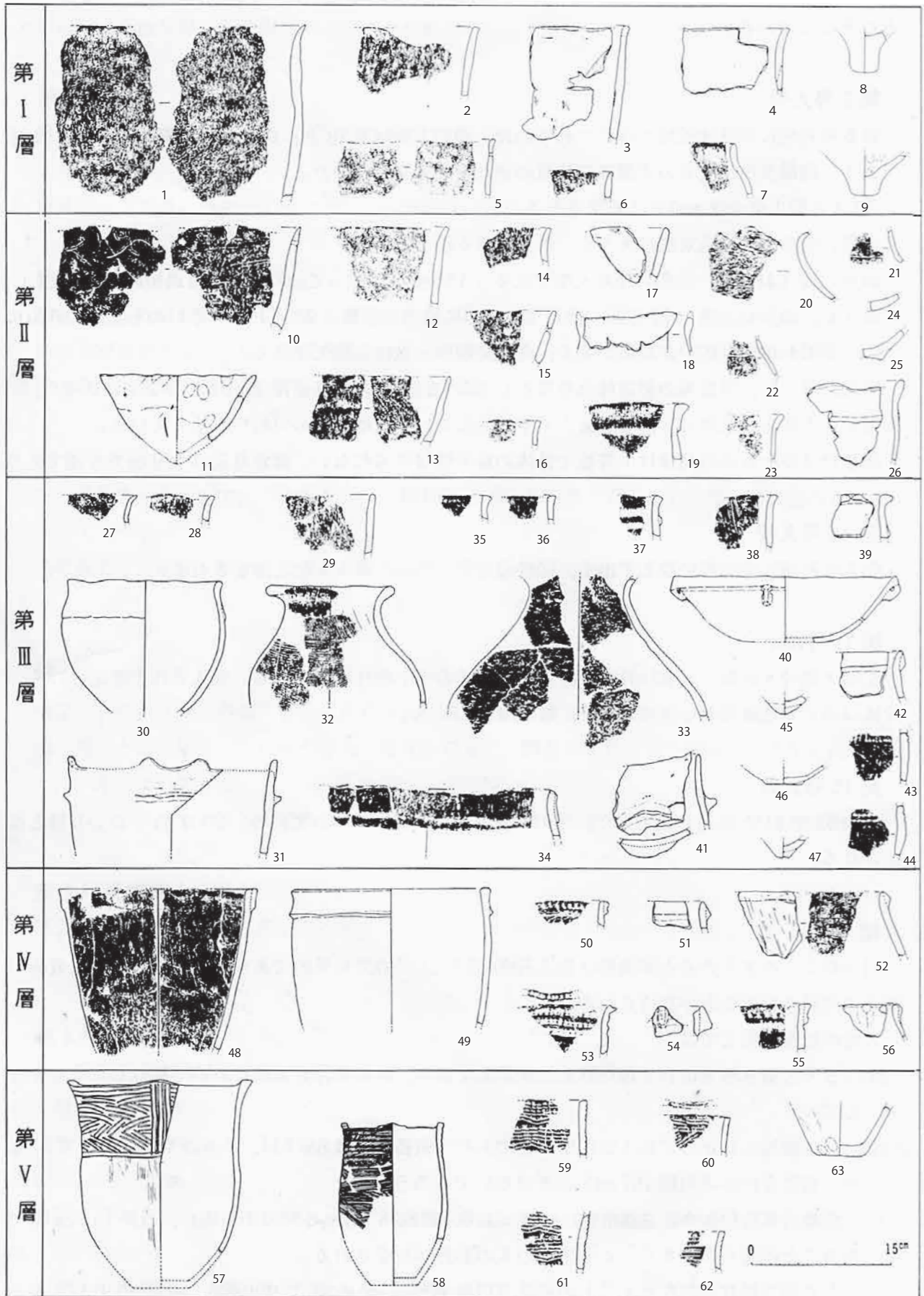


図12 木綿原貝塚出土土器(S=任意)

II層には、大当原式が加わる【D】。

#### 14) 伊礼原遺跡(砂丘区・伊礼原D遺跡)〔⑥ SS02〕〔⑦ SS03〕〔⑫ SS01〕〔⑳ SS4317〕

伊礼原遺跡は国史跡として指定されており、その指定範囲の外に、砂丘区伊礼原D遺跡が位置する。伊礼原D遺跡は2007～2008年に区画整理事業に伴い発掘調査されている〔山城・東門ほか2013〕。伊礼原遺跡砂丘区は、2007～2008、2012年に区画整理事業に伴い発掘されている〔山城・東門ほか2014〕。これまでに報告されている遺跡の位置関係を図13に示した。

伊礼原遺跡(砂丘区)ではSS01・02・03いずれも貝殻集積に伴う土器が出土する(図14)。A19～20(SS01)、T19(SS02)、T20(SS03)の3か所の位置関係はSS01-02間で約2.8m、SS01-03で約2.1m、SS02-03で1.1mと近く、土器平面分布でみるとI類(阿波連浦下層式)、II類(浜屋原式)が主体となる地域とされる<sup>(9)</sup>。

SS02では2(取上No1498)の土器が出土する。典型的な浜屋原式で口縁端部をゆるやかに外反させる。3は貝殻集積とともに回収された土器で、口唇部を平坦にし内外面ともに丁寧な調整であることなどから小片ながら阿波連浦下層式に分類される【B】。SS02は複数の貝殻が年代測定されており、集積内における貝殻の位置関係と年代の対応関係について検討が行われており、これによれば年代との対応関係がないといとされる〔木下2021〕。とは言え本遺構内部から2点の土器が得られ、1点は阿波連浦下層式に、1点は浜屋原式に該当するとみられ、年代も485～355BCに3点

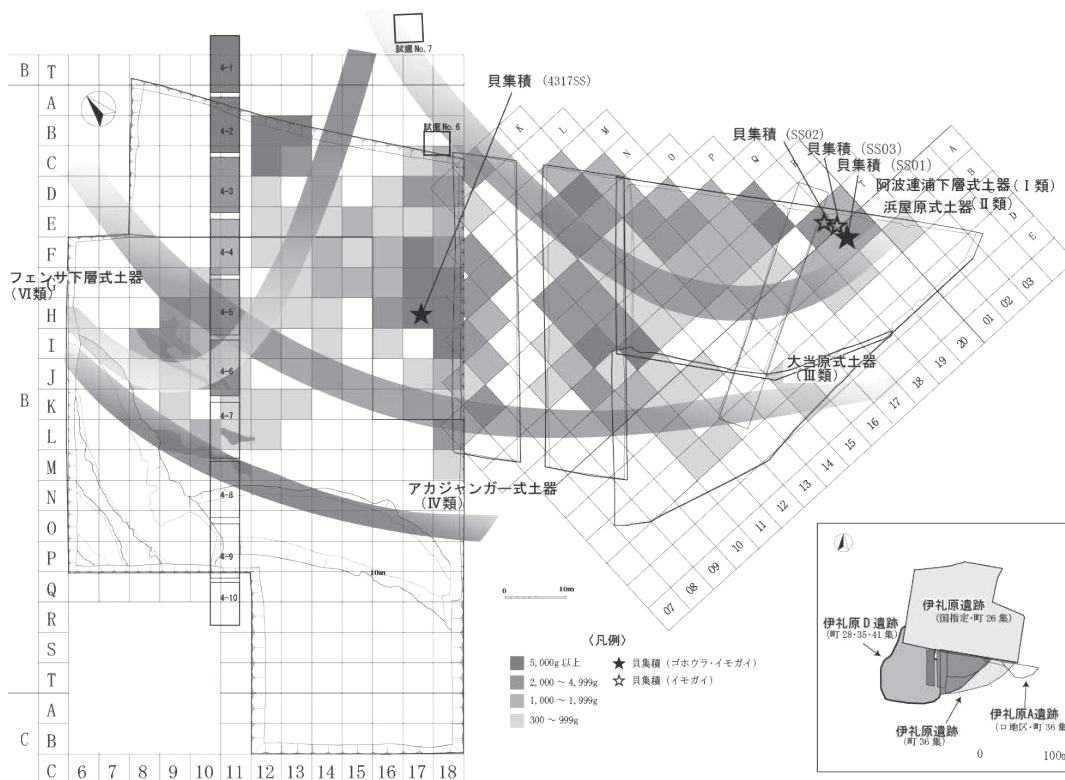
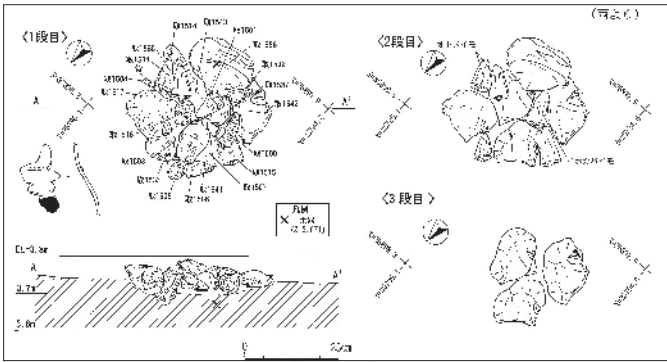
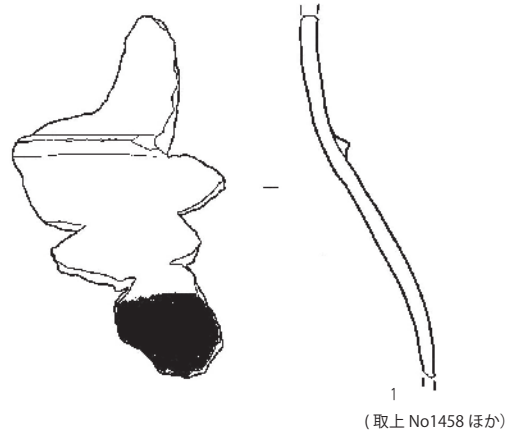


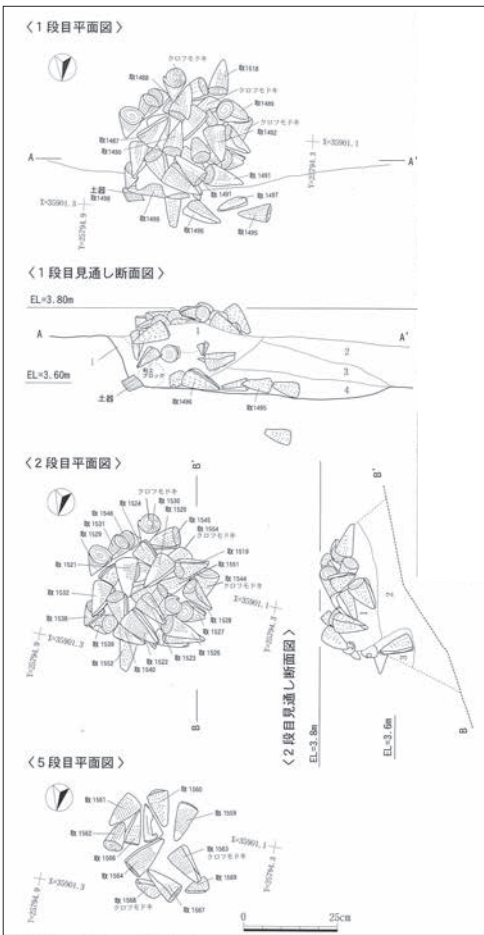
図13 伊礼原D遺跡(町28・35・41集)・伊礼原遺跡(町36)土器の平面分布と貝殻集積遺構位置図



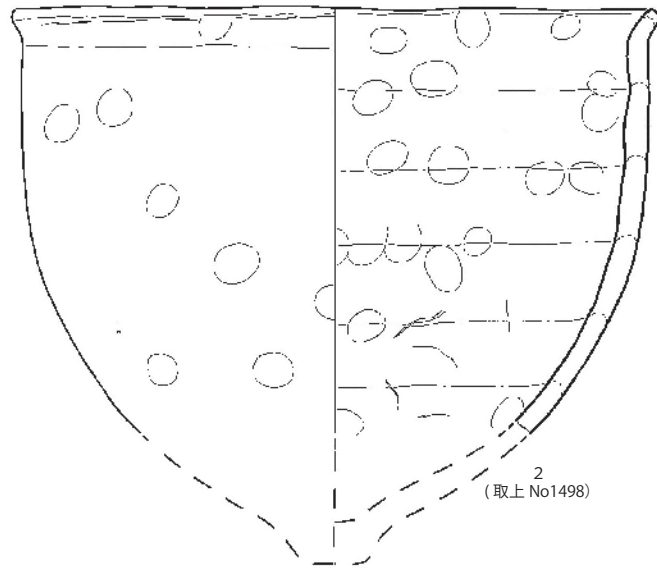
a 貝集積 SS01



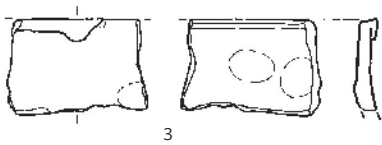
(取上 No1458 ほか)



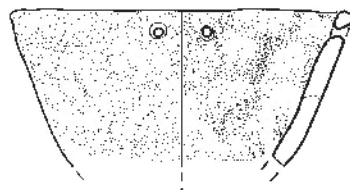
b 貝集積 SS02



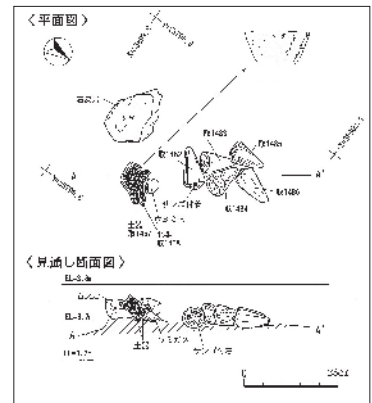
(取上 No1498)



3



(取上 No1457,1458)



c 貝集積 SS03

図 14 伊礼原遺跡検出の貝殻集積と貝殻集積出土土器 (S=1/4)

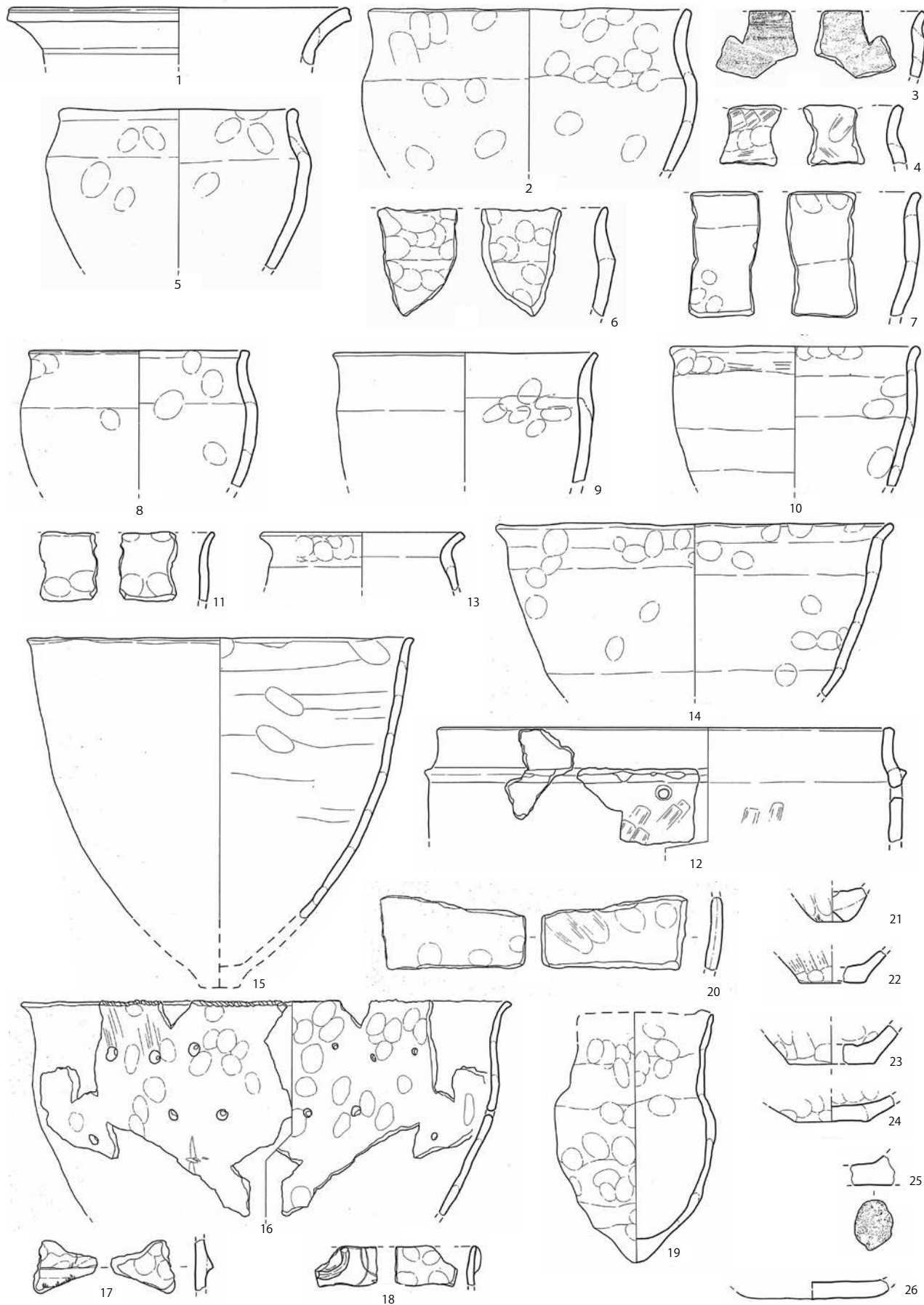


图 15 伊礼原遗迹砂丘区 (A·T-19·20) 出土土器 (S=1/4)

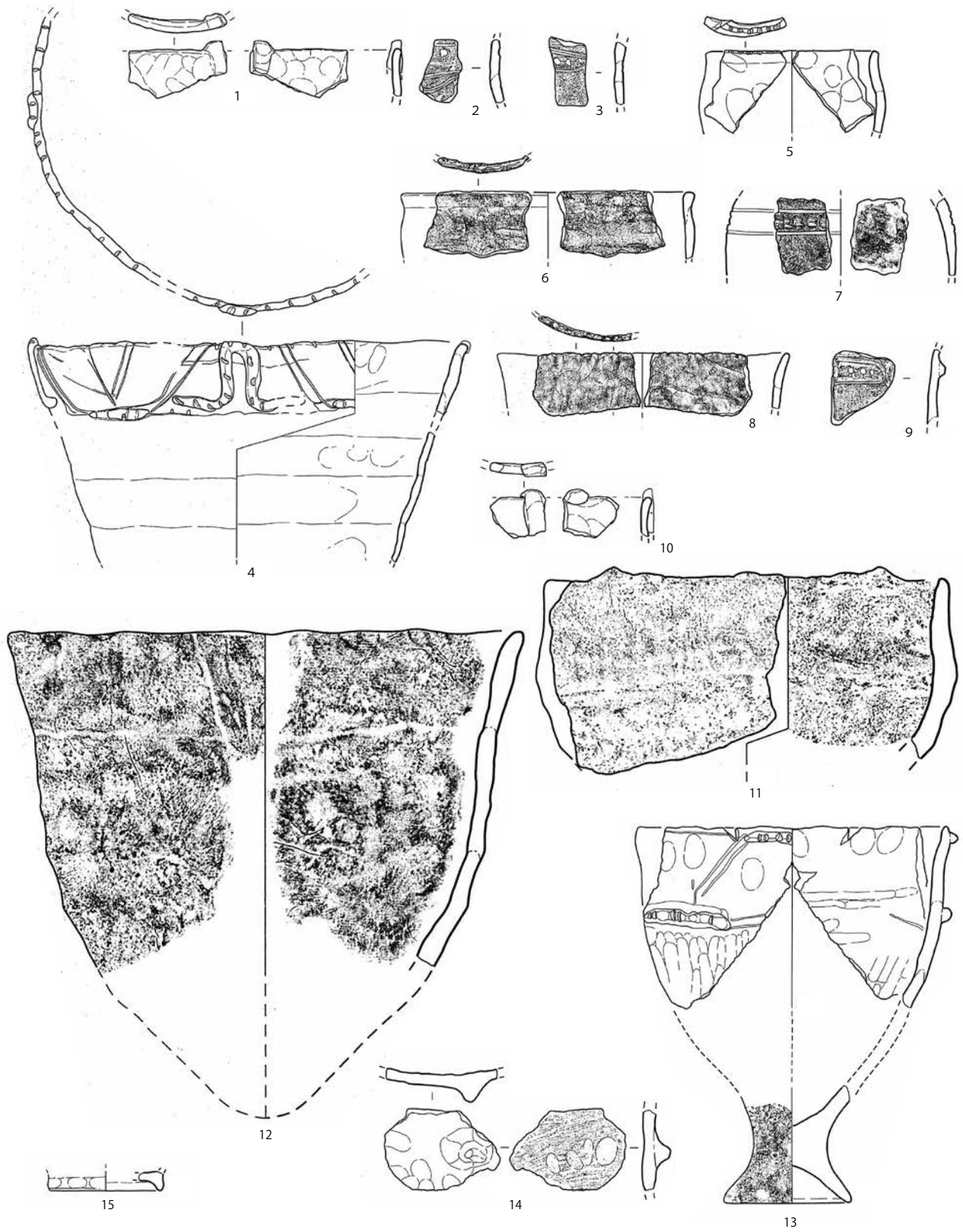


図 16 伊礼原D遺跡(H17) 出土土器(S=1/4)

の貝殻年代の全てが含まれ、1点の貝殻の年代が80BC～AD109とされる。但し、後者が下層、前者が上層となる点は層位と年代値が逆転している。それでも、前者の年代は阿波連浦下層式と後者は浜屋原式の年代と調和的となっている点は注目される。

SS03では4(取上 No1457, 1458の土器片)も典型的な浜屋原式で小型の鉢になる。補修孔が穿たれており、外面は平滑で内面に指頭痕が残る【B】。

SS01では1の弥生土器が集積直下から出土しており、共伴資料として扱われている【B】。

上記、SS01～03は先に紹介したよう互いに3m以内に近接するように検出されている。出土したグリッドは報告書Ⅰ・Ⅱ類が主体的に分布する地域である。これらの貝殻集積が検出されたA・T-19・20出土土器を図化された資料から図15に図示する。1は弥生土器、2～9は阿波連浦下層式、15は典型的な浜屋原式で、16～19は大当原式に分類される。一部Ⅳ層の資料もあるがおおよそⅤ層を主体とする。

伊礼原D遺跡では、SS4317イモガイ集積がH17 Vb層で検出される。土坑内から大当原式土器の胴部片が出土するが図化資料は無い【B】。当該グリッド出土土器(図16)は、Vb層では11・12の大当原式が出土(前者11は正確にはⅢ-Vb層)、13はスセン當式もしくはその影響下に製作された土器と目される【E】。その上層のⅡ・Ⅲ層では4の大当原式や2・3のアカジャンガー式で構成されている【D】。

#### 15) 宇堅貝塚【②第1集積】

1989～1990年に火力発電所建設に伴い発掘調査されている。「イモガイ集積遺構は、約70cmの範囲に34個のイモガイをストックした状態で検出された。他に25個集積したものもある[大城1992]」と報告されている。出土土器との位置関係、個別土器の詳細が不明であることから本論では検討を保留した。

#### 16) 中川原遺跡【⑩1号集積】【⑳3号集積】

1990～1991年度にリゾート開発に伴い発掘調査が行われている[仲宗根1992, 1993]。本遺跡の詳細は未報告であるため、出土土器との位置関係、個別土器の詳細が不明であることから本論では検討を保留した。

#### 17) 片江原遺跡【⑲2号集積】【㉑4号集積】【㉓12号集積】

1991～1992年度にリゾート開発に伴い発掘調査が行われている[仲宗根1993]。本遺跡の詳細は未報告であるため、出土土器との位置関係、個別土器の詳細が不明であることから本論では検討を保留した。

#### 18) 新城下原第二遺跡【㉗イモガイ集積2】【㉘イモガイ集積1】

1999～2005年度に基地内の整備工事に伴って調査された[片桐・久貝ほか2006]。イモガイ集積2及びイモガイ集積1は、Ⅱ地区川跡2に意図的集積したと考えられている。川跡はⅤ層を削っており、Ⅴ層出土遺物と川跡2に埋積する3層及び2層との比較により、Ⅱ地区Ⅴ層→川跡→イモガ



表2 新城下原第二遺跡Ⅱ地区出土土器(口縁部点数)

	晩期	I類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	弥生	不明	類型
I層			2		1		5	【D】
Ⅱ層								【D】
Ⅲ層			9		2		4	【D】
Ⅳ層			2				4	【参考】
川跡2-2層			18				8	【D】
川跡2-3層		2	12				1	【E】
V層	2	1	6	1			3	【C】
Ⅵ層		1						【C】

イ集積≡川跡2-3層→川跡2-2層→Ⅲ層→Ⅱ層の関係で考察可能である(図17)。Ⅵ層からは27の薄片の内湾する小型鉢が報告され、報告書の分類ではI類(阿波連浦下層式)に比定されている【C】。V層は21などのI類やⅡ類(浜屋原式)が多く見られる【C】。なお直接川跡2との切り合い関係が無いもののⅣ層からは浜屋原式から大当原式と考えられる資料が出土図示される【参考】。川跡2-3層図示資料はおおよそ浜屋原式と目される【E】。その上位層の川跡2-2層は浜屋原式のみとなる【D】。川跡を被覆するⅢ層より上位層では、Ⅳ類(アカジャンガー式もしくはアカジャンガー式と大当原式の間期的様相の土器)が加わる【C】。

### 19) 具志原貝塚〔㊸2号貝殻集積〕

1983・1984年に範囲確認調査を目的に発掘調査が行われた[安里・岸本ほか1985]。イモガイの貝殻集積が5基検出されており、このうちV層検出の2号貝殻集積と思われる資料が年代測定されている。報告では概要のみの報告で、写真図版のみからの判断だが掲載されている資料は大当原式が主体になっているとみられる【EあるいはCか】。

### 20) アンチの上貝塚〔㊸3号集積〕〔㊸4号集積〕〔㊸2号集積〕

2002年度に個人住宅建設に伴い発掘調査が行われた。対象調査区で回収された土器は、報告書によれば阿波連浦下層式からアカジャンガー式に比定される[盛本・安座間ほか2005]。調査区は4×4mの区画で、イ-2区のⅡ層下部で3号・4号集積が、ウ-5区のⅡ層で2号貝殻集積が検出されている。それぞれ土坑内、土坑周辺から回収された土器が存在することが報告されているが、微細な土器片のため時期を特定することはできなかったとされる。上記貝殻集積の検出された2グリッド出土土器を図化資料から掲載する(図18)。1～39はイ-2Ⅱ層、40～44はウ-5Ⅱ層出土資料である。

1～4は浜屋原式、6～8がアカジャンガー式として報告されている。9～32は有文土器で文様から類例を求め一部型式の推定が行われる。9は表裏面有文土器で広義の浜屋原式、10・12は大当原式、口唇刻目を施し、一部刻目突帯をもつ14～29の資料は主としてアカジャンガー式になると目され、一部大当原式段階の資料も含まれると考えられる。底部は乳房状尖底と尖底で、35は丸底外底面に粘土紐を高台状に付し側面観平底を呈する資料と評価されている。39は小型の碗状の製

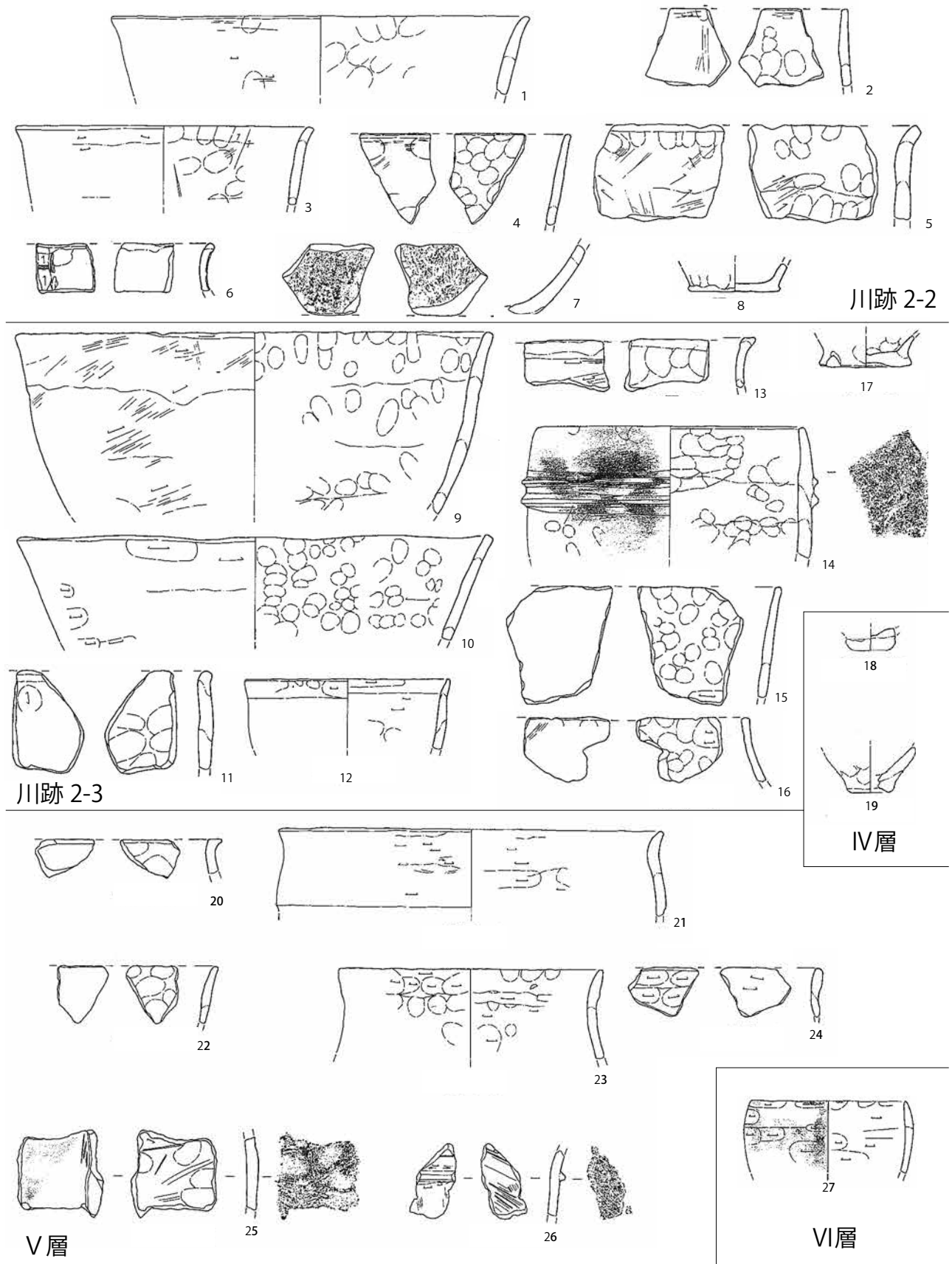


图 17 新城下原第2遺跡(Ⅱ地区)出土土器(S=1/4)

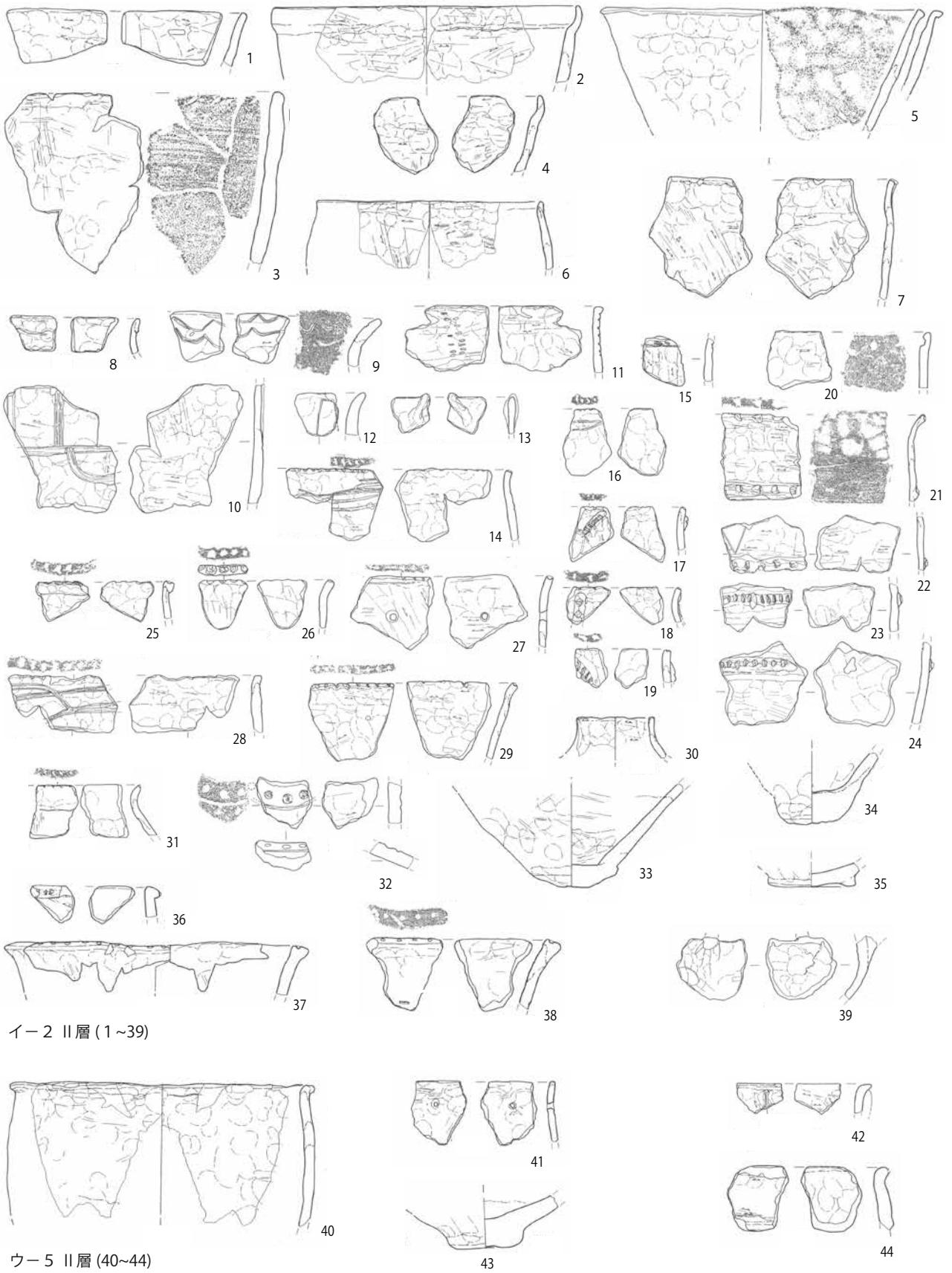


図18 アンチの上貝塚出土土器 (S=1/4)

品である。また、36は弥生土器、37・38は弥生系土器として報告される【E】。

40は阿波連浦下層式に近い資料で、41・42はアカジャンガー式、43は乳房状尖底の底部資料である。44は奄美諸島の弥生時代並行期の土器と目される【E】。

いずれとも、小片で新旧の土器型式が混在しており、貝殻集積との関係を特定の土器型式に寄せて検討することは難しい。総じて集計表（口縁部破片数）から、イ-2Ⅱ層ではⅣ類（おおよそアカジャンガー式）が約51%、Ⅱ類（浜屋原式）が31%となり、ウ-5Ⅱ層ではⅡ類（浜屋原式）が59%、Ⅳ類（おおよそアカジャンガー式）が約24%となっているものの貝殻集積の年代値はイ-2が古くウ-5が新しい。

## 21) 津堅貝塚〔㊸6号集積〕

2003年に港湾改修工事に伴って行われた発掘で多量の土器資料が回収されている〔宮城・東當ほか2005〕。報告された土器群は尖底、平底両土器群があり、出土した底部の集計では尖底と平底がほぼ5:5の割合で得られている。報告書では十分に検討が行われないものの、土器片は座標値を与え取り上げており、筆者は「検討によっては両土器群の関係を具体的に検討できる可能性がある〔宮城2009:25〕」と指摘した。しかしその時点では指摘するに留まり十分な検討が行えなかった。そこで、今回のデータを受けて津堅貝塚M-6グリッドの図化資料をピックアップして、うるま市教育委員会より提供を受けた座標データから水平垂直分布図を作成、貝殻集積の位置情報との関係を示した（図19-a）。図19・20はM-6グリッドから出土した土器で掲載された資料である。くびれ平底土器の底部資料など一部の土器は本論では掲載を見送り大当原式を主として24点を掲載した。1～15は大当原式と考えられる資料である。また20～24も報告ではくびれ平底土器などに分類されているが、実見した上で大当原式ではないかと推定された。（但し3と10はアカジャンガー式に分類されるべきとも考えられる。）これらの資料は同グリッド出土のくびれ平底即ちアカジャンガー式に比して下から出土している。他方、アカジャンガー式は16～19がこれに該当し、本論では未掲載だがくびれ平底土器が数点図示されている。総じて層位的にはⅣ～Ⅶ層として回収されている。この点で貝殻集積がⅦ層であることから出土状況類型は【D】と評価すべきであると判断されるものの、大当原式が【E】、アカジャンガー式が【D】として解釈するのが適当と評価した。

## 22) 浜屋原貝塚〔㊸ゴホウラ集積〕

1992年度に発掘調査が行われている〔仲宗根1993〕。本遺跡の詳細は未報告であるため、出土土器との位置関係、個別土器の詳細が不明であることから本論では検討を保留した。

## ⑥……………土器付着炭化物の年代測定資料

前項では貝殻集積と出土土器との関係を扱ったが、本項では土器付着炭化物の年代測定された資料を確認しておきたい。胴部片なども含めると十数例の報告があるが、図化され土器型式との具体的な関係を確認できる資料は管見の限り5点に限られる（図15-16、図21）。これを、IntCal20に改訂されたものを受け、再計算を行った<sup>(11)</sup>。前項の土器との関係を知る一つの定点として示しておく。

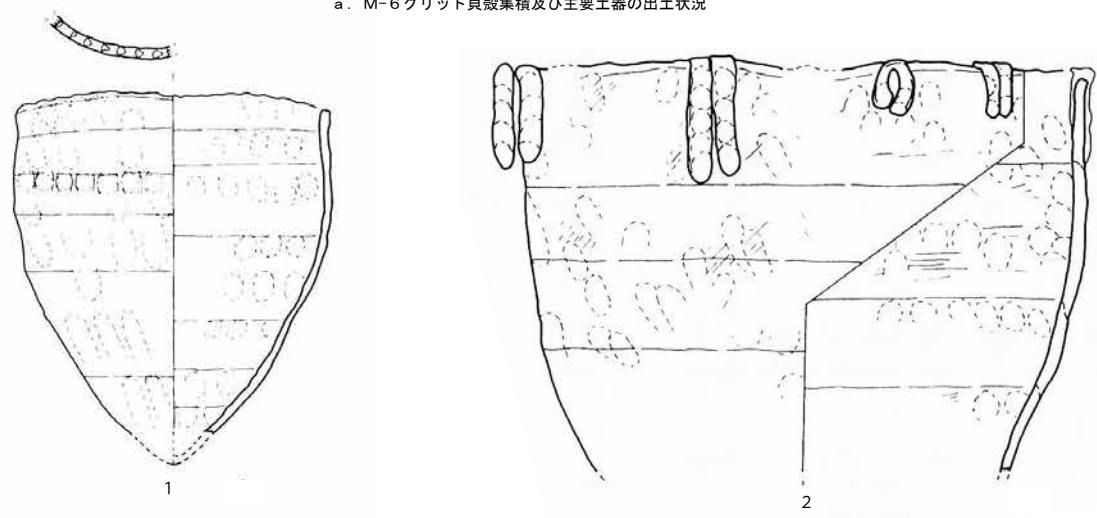
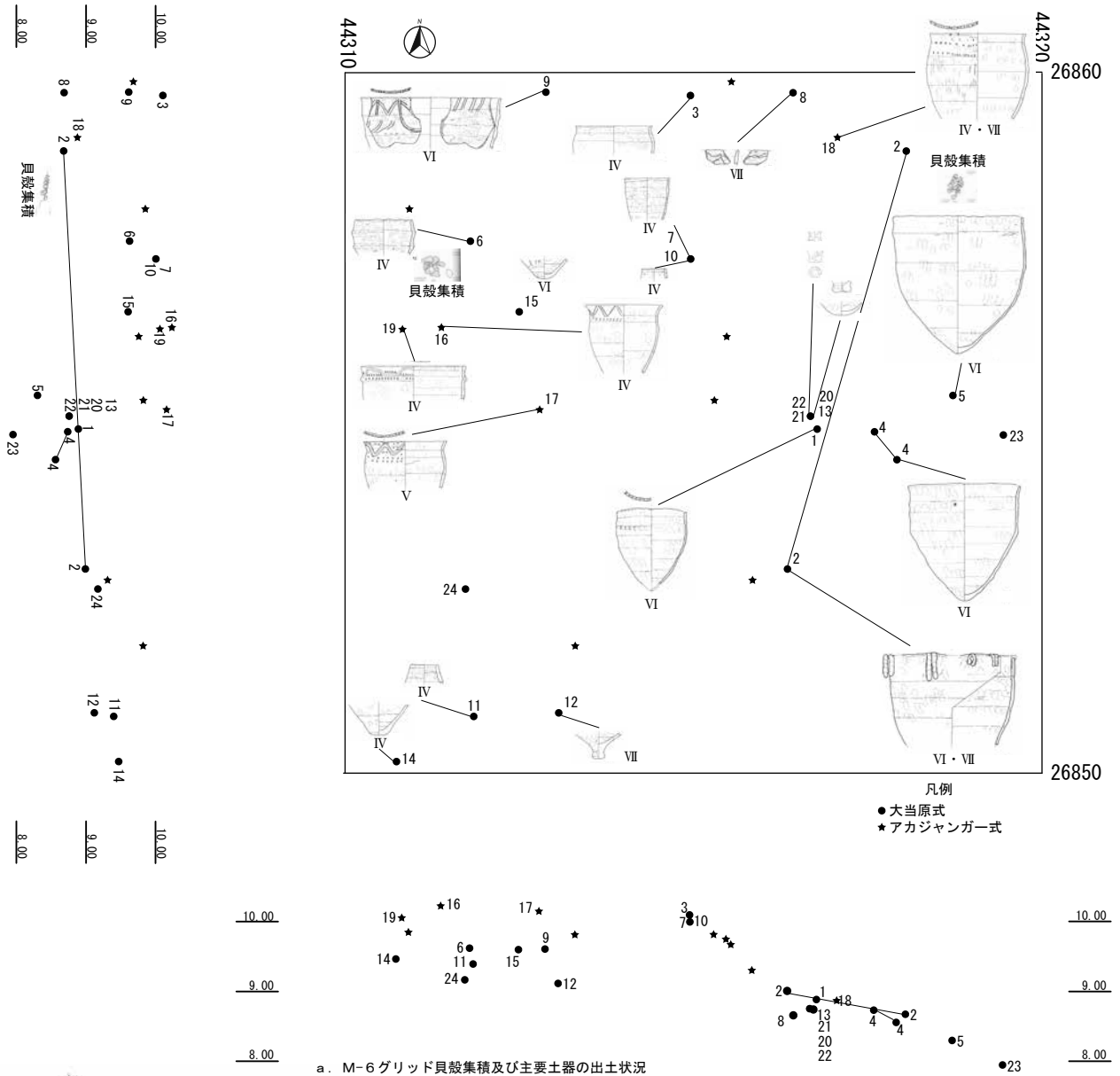


図 19 津堅貝塚出土状況及び出土土器 (S=1/4)

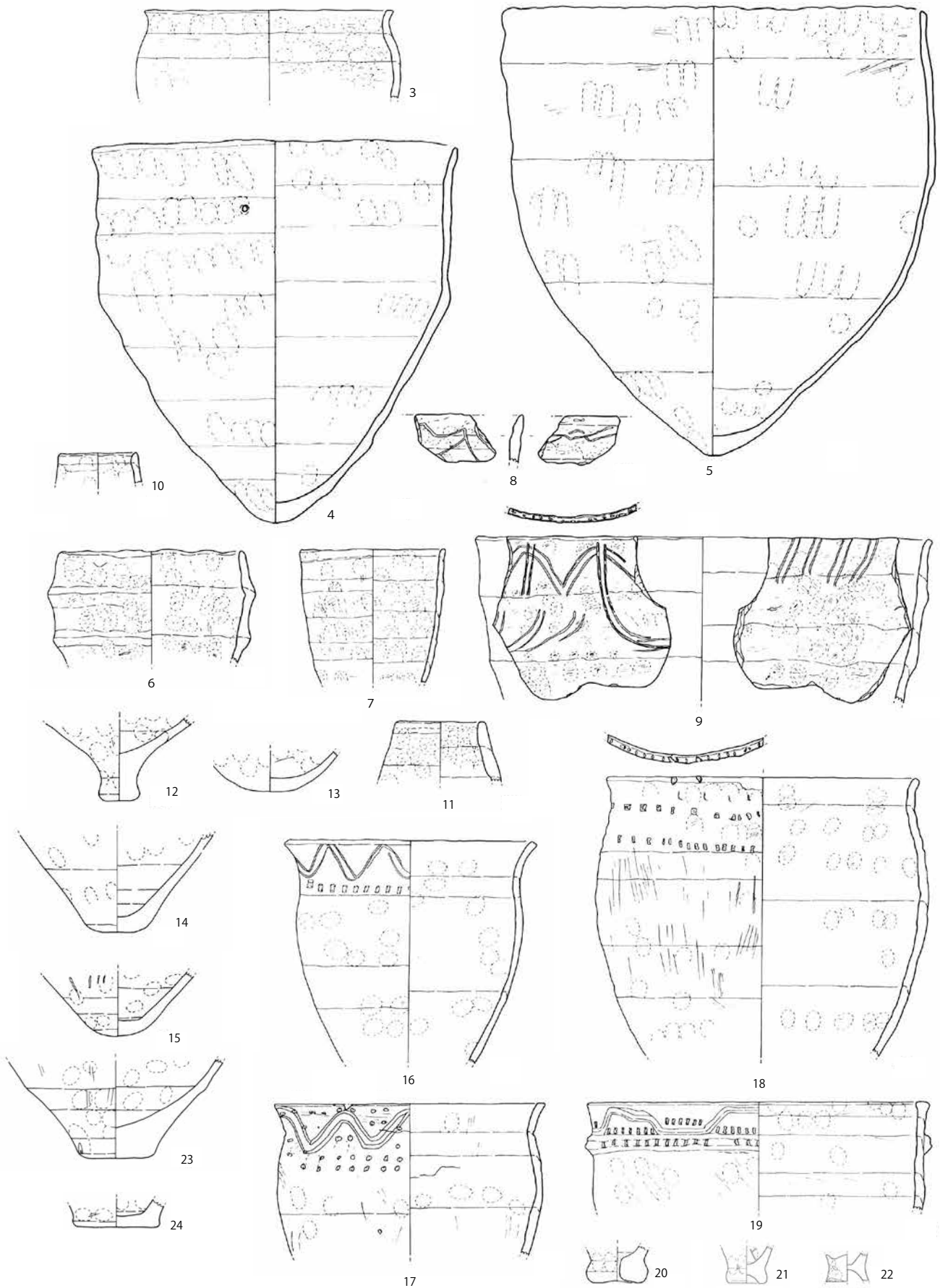


図20 津堅貝塚出土土器(S=1/4)

表3 土器付着炭化物の年代測定値

本論掲載 図番号	遺跡名・地点	報告書 図番号	土器型式	測定機関番号	炭素14年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	較正年代 (cal)		
							1 $\sigma$ (68.2%)	2 $\sigma$ (95.4%)	
図 21-1	平安山原 B遺跡	HB ②イ J10 白砂層	41 図-86	浜屋原式	IAAA-132708	2,350 ± 30	-23.90 ± 0.63	460 (11.9%) 435BC 420 (56.4%) 385BC	540 (0.4%) 530BC 520 (56.4%) 380BC
図 21-2	平安山原 B遺跡	HB ②イ J12 黒砂層	36 図-56	阿波連浦 下層式	IAAA-140523	2,220 ± 20	-25.48 ± 0.36	360 (7.5%) 345BC 315 (26.2%) 275BC 265 (12.9%) 240BC 235 (21.7%) 205BC	380 (16.3%) 340BC 325 (79.2%) 200BC
図 21-4	平安山原 B遺跡	HB ④イ O2 白砂層 下層トレンチ 3	50 図-154	大当原式 (新)	IAAA-122319	1,890 ± 30	-24.60 ± 0.42	AD120 (68.3%) 205	AD75 (95.4%) 235
図 21-3	津堅貝塚	M-6 VI層	13 図-23	大当原式	PLD-10784	2,090 ± 25	-25.88 ± 0.11	150 (12.0%) 130BC 120 (56.2%) 50BC	175 (94.2%) 40BC 10 (1.2%) 1BC
図 15-16	伊礼原遺跡	イ地区 S12・13 土器集中部	49 図-80	浜屋原式- 大当原式	IAAA-130357	1,770 ± 20	-23.07 ± 0.39	AD245 (10.4%) 255 AD285 (57.9%) 330	AD235 (23.1%) 265 AD275 (72.4%) 350

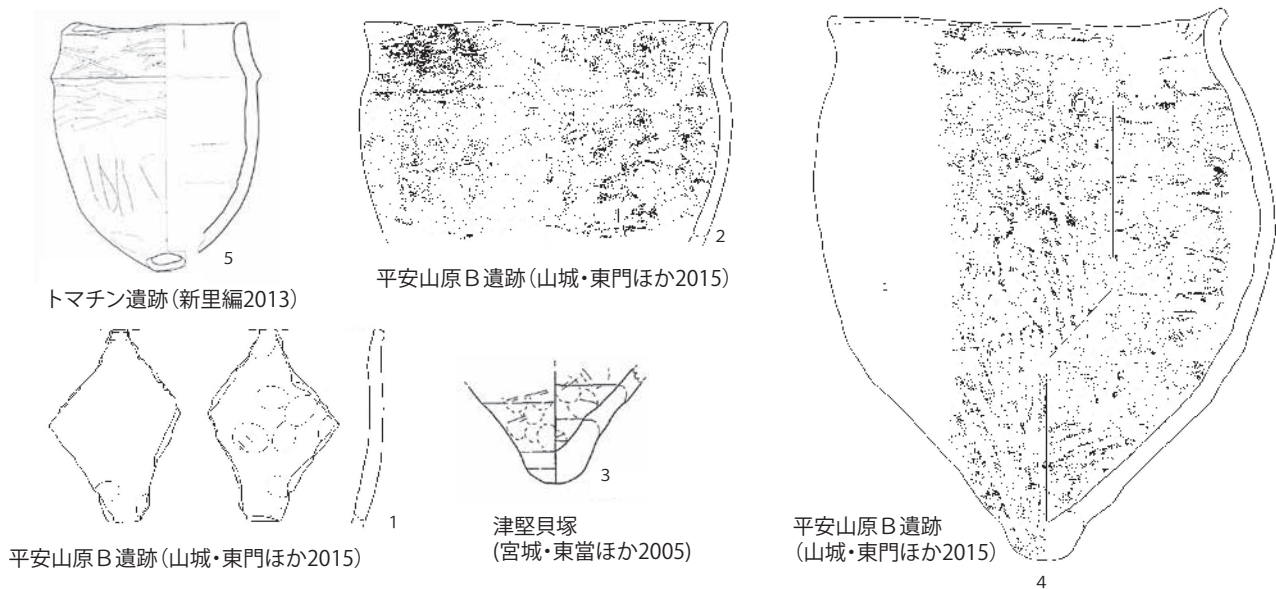


図 21 付着炭化物を年代測定された土器 (S=1/4)

図 21-1 は平安山原 B 遺跡 HB ②イ J10 白砂層出土資料で、典型的な浜屋原式である。付着炭化物から得られた較正年代は 1 $\sigma$  (以下断りの無い限り年代値は全て 1 $\sigma$  で表記する) で、460～385 cal BC の値を示す。これは後述する浜屋原式の年代がおおよそ紀元前 1 世紀～1 世紀にまとまるのに対して、およそ 300～500 年の開きがあることになる。

図 21-2 は平安山原 B 遺跡 HB ②イ J12 黒砂層で出土する浜屋原式もしくは阿波連浦下層式と目される。付着炭化物から得られた較正年代は、360～205 cal BC の値を示す。

図 21-3 は津堅貝塚出土の M-6 VI 層出土の乳房状尖底の底部資料で、大当原式の底部と目される。150～50 cal BC の較正年代を示す。これは同じ M-6 の VII 層で出土する 6 号貝集積の年代がおおよそ AD 400 にまとまり、本資料の較正年代もおおよそ 400～500 年の開きがあることになる。

図 21-4 は平安山原 B 遺跡出土土器で、乳房状尖底の特徴を持つ。本資料は以前に筆者が沖縄本島北部地域にみられる浜屋原式 (俗にやんばるの浜屋原式) もしくは、大当原式と判断される。付着炭化物から得られた較正年代は、120～205 cal AD の値を示す。

図 15-16 伊礼原遺跡砂丘区イ地区 S12・13 土器集中部から出土する大当原式と目される資料で

ある。付着炭化物から得られた較正年代は245～330 cal ADの値を示す。

なお、沖縄諸島の土器ではないが、図21-5 徳之島トマチン遺跡出土土器も年代測定されており、これについては報告時のIntCal09の較正年そのまま紹介するが、 $2\sigma$ で1026～911 cal BCの値が得られている<sup>(12)</sup>。本資料は仲原式の新段階に位置付けられている[新里2015]。石棺墓と関係のある資料とされ、発掘された石棺墓の被葬者人骨の年代測定値がおおよそ前8～前4世紀頃で、仲原式の年代観は人骨の年代値と整合的で、本土器付着炭化物の値が古く出ている可能性が考えられる。

上記の1 平安山原B遺跡、3 津堅貝塚、5 トマチン遺跡出土土器はいずれも土器型式の年代観とは400～500年の開きがあり、海洋リザーバー効果等測定値になんらかの影響があって古く出たものと解釈しておきたい。貝殻集積の年代とともに、これらの年代も次項各土器型式の年代比定の参考値として扱うことにする。

## 7……………考察

前項まで、これまでの年代観、新しく得られた貝殻集積遺構の貝殻の年代値、貝殻集積とその周辺から出土しおおよそ伴うと考えられる土器、そして年代測定が行われ型式が推定可能な土器付着炭化物の年代値について確認してきた。各土器型式と年代測定の値を表4に整理した。以下、型式ごとに貝殻集積の年代について概観する。

### 1) 仲原式土器

仲原式は③大原貝塚A地点SI01、⑧木綿原遺跡Ⅲ層、④熱田貝塚A-12Ⅲ層、⑳㉑新城下原第2遺跡Ⅴ層で出土する。㉑㉒新城下原第2遺跡Ⅴ層が仲原式と阿波連浦下層式を含み【C】となり、他は【E】となる。また、⑧木綿原遺跡Ⅲ層では年代にバラつきがあり、一つは450～375 BC、もう一つは45～10 BCを $1\sigma$ の確率で全て含む。仲原式以外にも浜屋原式が含まれることを考えると後者は仲原式ではなく、浜屋原式期に貝殻集積がつくられたと理解するのが整合性は高いと推定、2018年に年代測定された前者1点のみ300年ほど古い年代であること、同遺跡石棺墓から出土する人骨の年代の値がおおよそ前8世紀以前となることから、これらの資料が仲原式と相関すると推定される。

他方、調査区内で仲原式がほぼ皆無の①②嘉門貝塚A・Bの存在は見逃せない。仮に本遺跡の形成された時期には既に型式交代しているとみた場合、仲原式の下限はかなり遡ることになる。①嘉門貝塚Bの13号貝集積と②嘉門貝塚Aの1号貝集積は、歴博の行った年代を分類する木下尚子分類(以下、木下分類)のA群に位置付けられ[木下2021]、500 BCよりも前として評価する。しかし土器からみた場合、ほぼ仲原式単純の③大原貝塚AのSI01→仲原式が近接して出土し阿波連浦下層式を共伴する④熱田第2貝塚→仲原式の出土がほぼ出土しない①②嘉門貝塚A・Bの順で理解するのが最も蓋然性が高いと考える。無論、嘉門貝塚ABの調査区外に仲原式期の遺物が存在した、あるいは前項で紹介した一部の土器を仲原式と評価し、仲原期の活動が本地域まで及んでいた可能性も十分考慮されるべきである。年代ではなく、主体土器から、現状の調査成果を上記序列と仮定した。



このような理解が指示され、加えて年代値からも確立分布範囲で収まると理解するのであれば、③大原貝塚 A の貝殻集積が 745～625BC、④熱田第 2 貝塚が 495～395BC である。①嘉門貝塚 B13 号集積の古い年代値の 2 点があるものの、それを除けば大原貝塚 A、熱田第 2 貝塚と近い。以上、仲原式の上限は貝殻集積の事例に限られるものの、大原貝塚 A、木綿原遺跡の石棺墓、トマチン遺跡石棺墓の年代観を参考とし、おおよそ紀元前 8 世紀頃を上限として仮定しておきたい。また、その下限は紀元前 5 世紀頃と考えられ、この頃が次型式即ち仲原式から阿波連浦下層式の交代期と捉えられる。

## 2) 阿波連浦下層式土器

阿波連浦下層式のほぼ単純出土となる⑭古座間味貝塚第 1 号住居址、⑩阿波連浦貝塚 VI 層では【E】で 490～150BC に較正年 1 $\sigma$  の値が全て含まれる。①嘉門貝塚 B も複数型式にまたがる土器が出土、長期に営まれたと推定されるものの、前項仲原式の下限年代を考察したとおり 13 号集積の貝殻の一部が最も古い年代値を示す。この集積の貝殻は複数サンプリングされており、その年代にバラつきがみられるが、測定誤差ではなくこれらの貝殻の年代を俯瞰的に理解するならば、「複数の時期に採取された貝殻を取り込んで機能 [木下 2021]」したとされており、これに即して考察を進めていきたい。この場合、貝殻集積と土器との関係の種類によって参考にするべき年代は異なる。つまり【C】であれば、遺構の始期との関係でこれを上限として整理され、【D】であれば遺構の終期即ち廃絶後にその上位に被覆した層と考えられ貝殻の最新年以降の土器と整理することができる。①嘉門貝塚 B13 号集積から、貝殻集積に伴う土器は最新年を持つ貝殻が 455～380BC で、おおよそ 500BC 以降にあると類推することができる。

攪乱層のため【参考】とした⑬宇地泊兼久原が 395～345BC と前出の内にあり、おおよそまとまっている。阿波連浦下層式がほぼ排他的な遺跡で最も古い年代値が得られているのは⑳㉑新城下原第二遺跡川跡 2-2・3 層で 75BC～AD15【E・D】となる。他方、出土土器の点数は少ないものの⑥⑦伊礼原遺跡砂丘区 SS02・03 とともに【B】で浜屋原式を含み年代は木下分類 B 群に比定されており、次型式の出現年の参考値よりもやや古くなる。

概して⑩阿波連浦貝塚 VI 層や①嘉門貝塚 B13 号集積では阿波連浦下層式古段階の資料が出土、年代は 2 点の貝殻から得られ 490～360BC で確率分布が重複するのが 440～400BC、後者はバラつきが 3 例あり、古い 2 例を除く確率分布の重複する範囲は 455～425BC となる。一部浜屋原式も含む可能性があるため全てを阿波連浦下層式新段階と解するには慎重な議論が必要だが⑬宇地泊兼久原遺跡の年代値が 395～345BC であることを考えると、宇地泊兼久原遺跡が相対的に新しい年代であり型式学的理解と調和的である。最後に終期については、次型式の浜屋原式出土例で最古例を確認すると、⑥⑦伊礼原遺跡砂丘区 SS03・SS02 があげられる。年代的には他と外れて古く評価が難しいが、これについては次項で詳述する。

## 3) 浜屋原式土器

浜屋原式は【B】が複数例あり参考値は多い。⑥伊礼原遺跡砂丘区 SS02 で 4 点中 3 点が 405～395BC を全て含み、1 点は 80BC～AD109 となる。⑱大久原遺跡の 2 号が 200～115BC、㉒同 10

表4 貝殻集積遺構の年代値と出土土器

No	遺跡名称	対象	遺構名称	年代*	集積との関係	搬入土器			宇佐浜ほか	仲原式	阿波連		浜屋原		大当原		アカジャンガー
						弥生	古墳	その他			古	新	古	新	古	新	
⑧	木綿原貝塚	IV, V層	イモガイ集積	a.450-375BC b.45-10BC	C				●								
⑧	木綿原貝塚	III層	イモガイ集積	同上	E				○	○	○	○	●	●			
⑧	木綿原貝塚	II層	イモガイ集積	同上	D				●	○	○	○	○	○	●	●	
③	大原貝塚A	SI01	SI01	745-625BC	E				○	●							
④	熱田第2貝塚	A-12, 11	ゴホウラ集積	495-395BC	E					●							
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	II区VI層	集積1・2	40BC-AD15	C						○						
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	II区V層	集積1・2	40BC-AD15	C						○	●	●	●			
①	嘉門貝塚B	しすせ-24, 25, 26 IV層	13号集積	a.790-750BC b.705-570BC c.425-455BC	E						●	●	●	○	○	○	
②	嘉門貝塚A	さ-19	1号集積	475-490BC	E									●	●		
⑭	古座間味貝塚	住居址内	第1号住居址	a.385-305BC b.295-150BC	E					○	●	○					
⑤	小掘原遺跡	C区	87KSS	390-465BC	E										●	●	
⑩	阿波連浦貝塚	ホ-14 VI層	集積	440-400BC	E						●	○					
⑬	宇地泊兼久原遺跡	M-26	Mトレンチ	395-345BC	参考							●	○				
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	川跡2-3	集積1・2	40BC-AD15	E							●	●				
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	川跡2-2	集積1・2	40BC-AD15	D							●	●				
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	II区IV層	集積1・2	40BC-AD15	参考							●	●				
②⑦②⑧	新城下原第二遺跡	II区III層	集積1・2	40BC-AD15	D							●	●				○
②③	大久保原遺跡	遺構内	2号集積	200-115BC	B							○					
②③	大久保原遺跡	遺構内	10号集積	115-25BC	B							○					
⑥	伊礼原遺跡(砂丘区)	遺構内	SS02	a.405-395BC b.80BC-AD109	B						○	○					
⑦	伊礼原遺跡(砂丘区)	遺構内	SS03	390-340BC	B							○					
②⑤	伊礼原遺跡(砂丘区)	遺構内	SS01	35-1BC	B	○											
⑥⑦②⑤	伊礼原遺跡(砂丘区)	A, T-19, 20	SS01 SS02 SS03	a.405-395BC b.390-340BC c.80BC-AD109 d.35-1BC	E						●	●	○	○	○		
⑩	阿波連浦貝塚	ホ-14 IV層	集積	440-400BC	D							○	●				
②⑨	平敷屋トウバル遺跡	Z-35 V層	集積7	10BC-AD25	E							●	●				
②⑨	平敷屋トウバル遺跡	Z-35 IV層	集積7	10BC-AD25	D								●	○	○		
②⑨	平敷屋トウバル遺跡	Z-35 II層	集積7	10BC-AD25	D								○	○	○	○	
⑪	平敷屋トウバル	R-32 V層	集積1	460-380BC	E												○
②⑥	具志堅貝塚	I区床着	SH2	AD10-30	E	○		○				●	●	●			
②⑥	具志堅貝塚	J-52 II層	SH2	AD10-30	D	○		○				●	●	●			
③①③②	アンチの上貝塚	イ-2 II層	3・4号集積	AD60-85	E	○		○				●	○	○	●	●	●
①⑦	嘉門貝塚B	さしす-20, 21, 22 IV層	8号集積	a.250-145BC b.70-25BC	E								●	●	○		
②⑩	嘉門貝塚A	こ-18	2号集積	200-130BC	E								●	●	●		
③③	具志原貝塚	西区V層	2号集積(?)	AD345-365	EorC										●	●	
②④	平敷屋トウバル遺跡	T-24	集積2	105-30BC	D												○
③④	伊礼原D遺跡	H17 V b	SS4317	AD340-405	E										●	○	
③④	伊礼原D遺跡	H17 II III層	SS4317	AD340-405	D			○							○	○	○
③④	伊礼原D遺跡	遺構内	SS4317	AD340-405	B										○		
③⑥	津堅貝塚	M-6 IV-VII層	6号集積	AD390-410	EorD										●	●	●
③⑧	アンチの上貝塚	ウ-5 II層	2号集積	AD545-620	E	○		○				●	●	●	●	○	
⑨	大久保原遺跡	遺構内	8号集積	450-380BC	-												

No	遺跡名称	対象	遺構名称	年代*	集積との関係	搬入土器			宇佐浜ほか	仲原式	阿波連		浜屋原		大当原		アカジャンガー
						弥生	古墳	その他			古	新	古	新	古	新	
⑩	中川原貝塚(2次)	-	1号集積	235-135BC	-												
⑪	宇堅貝塚	-	第1集積	140-105BC	-												
⑫	片江原貝塚	-	2号集積	115-30BC	-												
⑬	片江原貝塚	-	4号集積	115-105BC	-												
⑭	片江原貝塚	-	12号集積	10BC-AD70	-												
⑮	浜屋原貝塚	-	ゴホウラ集積	AD385-465	-												
⑯	中川原貝塚(2次)	-	3号集積	AD525-610	-												

●主体的に出土 ○出土が見られる ・僅かに出土する ◎遺構内で1・2点出土  
 ※複数の貝殻の年代測定が出ているものは、1σの確率が全て含む年代幅を記載している。バラつきがあるものに関しては、ab.を付して複数記載している。

号貝集積が115～25BCでやはりこれも遺構内共伴の【B】となる。1点だけ年代が外れる⑦伊礼原遺跡砂丘区SS03が古い年代で、これを除けば全体的なまとまりは良い。貝殻集積を被覆する堆積層中に含まれる土器は、少なくとも貝殻集積が構築されたときには登場していたことを示し、年代の参考とすることができる。但し、先に述べた通り貝殻集積の年代のバラつきが複数時期に採取された貝であり、長期利用の可能性を考えると、貝殻集積に伴う土器はこれが伴った時期比定をそのバラつきの幅の中で整理する必要がある。

⑳㉑新城下原第2遺跡の川跡が【E】で貝殻集積は40BC～AD15年に全て含まれている。浜屋原式が占有的で上下層の出土状況とともに参考となる。同じく【E】では㉒具志堅貝塚、㉓平敷屋トウバル遺跡V層の年代分類では木下年代分類D群に比定されている。

上記のとおり伊礼原遺跡砂丘区SS03の貝殻集積を除けば、200BC～AD100頃に年代値は収まる。阿波連浦下層式と浜屋原式の型式交代期は、浜屋原式の1σの確率分布範囲の上限200BCから阿波連浦下層式に係る貝殻集積の1σの確率密度分布で新しい方の150BCの間にあると暫定的に評価しおおよそ紀元前2世紀後半頃と仮定しておきたい。他方、下限について言及できる資料は乏しい。㉓平敷屋トウバル遺跡V層の出土状況を考えると1世紀頃まで浜屋原式であったと推察され、おおよそ2世紀頃に型式交代期を想定しておきたい。未校正ながら浜屋原式の新段階として標式資料となる阿波連浦貝塚第IV層の炭素14年代は2060±100yBPとこれも近似値となっている。但しその後200年ほどの空白期があって、次型式の大当原式との共伴例が増えることから終期については更なる資料の追加と、浜屋原式から大当原式の細分編年が行われ整理することが望まれる。ここでは暫定的に浜屋原式は木下分類D群並行と理解し終期の参考としておく。

#### 4) 大当原式土器

大当原式は、㉔伊礼原D遺跡SS4317が【B】で胴部片が出土、貝殻集積が検出されたH17Vb層の包含層出土資料の年代はAD340～AD405を全て含む【E】。大当原式でほぼ占有される遺跡では、㉕津堅貝塚6号集積がAD390～AD410を全て含む【E】、土器は下部に尖底、上部に平底となるため、下部の遺物群の下位から貝殻集積が確認されている。なお上限を考える上では、【D】で最も新しい㉓平敷屋トウバル遺跡V層が10BC～AD25の全てを含む範囲が一つの参考となる。大当原式が主として出土するのはこれより上位IV-II層であることから、これより新しくなると理

解する。また、貝殻集積の年代に空白のある AD100～AD300 に関しては、平安山原 B 遺跡出土土器（図 21-4）の AD120～AD205、伊礼原遺跡砂丘区出土土器（図 15-16）AD245～330 の土器附着炭化物の較正年代がここに分布し大当原式の特徴を有する。但し前者は器表面の凹凸がなく外面はやや平滑で、内面に刷毛目状の擦痕が残る。<sup>(13)</sup>

さて、大当原式にも新古あると考えられている〔宮城 2009, 安座間 2014, 新里 2015〕。総じて、土器の形状・サイズの多様化が指摘され、甕（深鉢）は直口厚手の乳房状尖底から外反薄手の砲弾状尖底、器面調整において粘土帯接合帯の隆起が顕著な粗雑→薄手堅緻でナデ調整が丁寧となる変化と文様の多寡などから型式変化の方向性が示されている。古段階の資料群は特に大型の深鉢に顕著で粗隆文土器とも呼称される〔高宮 1993〕。粗隆文土器の有無と貝殻集積との関係から新古の年代比定を試みたいところだが、年代資料、共伴関係の把握可能な資料に乏しく、以下に暫定的な所見を記す。

伊礼原 D 遺跡 H17 では Vb 層から粗隆文土器が出土、そのほぼ上位層からやや薄手で文様の多い資料が含まれる。また、粗隆文土器の出土の少ないアンチの上貝塚 2 号集積が木下分類 F 群であることを考えると古段階が木下分類 E、新段階が木下分類 F としておきたい。

最後に、尖底土器群に後続すると考えられるアカジャンガー式については、貝殻集積との関係はいずれも E・D で、他の型式とともに出土すること、これまで確認されているアカジャンガー式単純出土状況を示す遺跡からの貝殻集積の検出例が無いことを考えると木下分類 F 群の時代の外、即ち貝殻集積遺構がつくられなくなる時代に相当するのではないかと推定される。なお、アカジャンガー式の始期に関する理解としては、6～7 世紀頃と推定する所見が示されており〔宮城・安座間 2013, 新里 2004, ほか〕、並行関係と指摘される奄美諸島の兼久式土器も 6～7 世紀と指摘〔高梨 2005, 川口 2019, ほか〕され、調和的である。以上を参考とし、貝殻集積遺構の終焉と関連するものと推定しておく。

最後に、年代分類とあわせると、木下分類に依拠したところもあるが、若干の幅を持たせ、以下のように整理する。

- ・仲原式 紀元前 8 世紀～紀元前 5 世紀 ほぼ木下分類（以下省略）A 群に相当（弥生時代前期前葉～中葉）
- ・阿波連浦下層式 紀元前 5 世紀～紀元前 2 世紀後半 ほぼ B 群に相当（弥生時代前期後葉～中期中葉）
- ・浜屋原式 紀元前 2 世紀後半～2 世紀頃 ほぼ C・D 群に相当（弥生時代中期後葉～後期中葉）
- ・大当原式 2 世紀頃～6・7 世紀 ほぼ空白期・E・F 群（弥生時代後期後葉～古墳時代）
- ・アカジャンガー式 6・7 世紀以降

これは仲原式を黒川式新段階（無刻目突帯文土器段階）～弥生前期、阿波連浦下層式を弥生中期前半～弥生中期初頭あるいは前半頃、浜屋原式を弥生時代中期前半新段階～中期後半、大当原式を弥生時代後期後半～古墳時代の全時期とする所見〔新里 2015〕とおおむね調和的である。

## おわりに

本論は、冒頭紹介したとおり歴博が進める年代測定のデータ提供を受け取り組んだ土器編年に関する論文である。当初各土器型式の細分編年を志向し、研究の歩みを更に1歩進めるべきと取り組んだが、筆者の力量不足から関連の資料を抽出しこれを実見し再点検するだけとなり、基礎資料の提示に留まっている。また、年代も包括的に述べたところがあり、確率分布からもう少し絞ることもできると考えたが、今後進められる細分編年とあわせて論じるのが適当と判断し、課題とした。年代測定値が前提となった本論では、やや土器と貝殻集積の関係において曲解した可能性も否定できず、年代の関係についてはより慎重な意見もあろうかと思う。先学諸先生方のご叱正賜りたい。

本論を執筆にあたり、歴博のプロジェクトメンバーや縣市町村教育委員会のご担当者にお世話になりました。末文となりましたが以下に氏名を記し感謝申し上げます。

安座間充、新垣力、安和吉則、猪股麻紀、上地克哉、上原静、大城剛、太田菜摘美、片桐千亜紀、我如古千里、木下尚子、儀間美来、幸喜邦恵、坂本稔、崎原恒寿、篠田謙一、鳥袋春美、新里貴之、菅原広史、瑞慶覧長順、瀧上舞、田里一寿、玉城綾、東門研治、仲田眞一郎、藤尾慎一郎、牧山美緒、松原哲志、宮城伸一、山城安生、横尾昌樹

## 註

(1)——本論では、貝塚時代呼称を用い、ほぼ縄文時代に並行する前期と弥生～平安時代に並行する後期に区分する時代区分案〔高宮ほか2014〕を用いた。

(2)——文部科学省補助金新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤボネシア人の起源と成立の解明」の計画研究B01班「考古学データによるヤボネシア人の歴史の解明」(代表 国立歴史民俗博物館教授 藤尾慎一郎)の調査報告のデータ提供を受けた。

(3)——木下尚子氏より投稿中の論文の提供を受けた。

(4)——貝殻を土器収納する事例は沖縄での発見例は皆無で概念的な事例として設定する。なお、オオツタノハの貝輪製品は土器に収納された状態で出土する例が確認されており参考になる〔栗島2020:64〕。

(5)——嘉門貝塚A及び同Bの調査報告書では、各出土土器の出土地点、出土層が掲載されていない。近年浦添市教育委員会が台帳を整理しており、これに基づいて資料の抽出や集計の分析を行った。

浦添市HP「遺物(遺跡出土品)台帳の公開について」  
<http://www.city.urasoe.lg.jp/docs/2016021500045/>  
(2020年8月22日アクセス)

(6)——報告書掲載資料は胴部把手として図化されているが、崎原恒寿の再整理によって脚部として図化されている〔恩納村史編さん委員会2020:『恩納村史 第2巻

考古編』恩納村役場〕。崎原恒寿氏より図化資料の提供を受けた。

(7)——本壺形土器に関しては、過去に浜屋原式であることを指摘〔宮城2005:56〕しながら、大当原式の概念整理の際にも図を掲載〔宮城2009:22〕した。しかし後者では説明が無いままとなっており、混乱を招くため、改めて胎土から浜屋原式に比定される可能性を指摘しておく。

(8)——未報告資料であるが、集積及びこれに伴う土器について、読谷村教育委員会より提供を受けた。土器は筆者の図化による。資料の図化に際しては、上地克哉氏よりご教示いただいた。

(9)——遺物の分布と貝殻集積との関係については、土器使用場所と貝殻集積遺構の位置関係は異なる可能性がある。鳥袋春美氏によれば、伊礼原遺跡(国指定外)SS02は、国指定部分に阿波連浦下層式土器を主体とする場所がありこれが近いとする。また、小堀原遺跡(2012)87KSSの貝殻集積の例も、近いのは大当原式土器を主体とするが、土器の放射性炭素年代測定値からはそれより離れたa区(浜屋原式土器主体)と年代的に近いと指摘する。土器使用の場所と貝殻集積遺構の間には空間があった可能性を指摘する(鳥袋春美氏私信)。

(10)——土器の座標データについては、宮城伸一氏(う

るま市教育委員会)より提供を受けた。また、貝殻集積の座標については、報告書〔宮城・東當2005〕掲載の位置情報を用いた。

(11)——年代の再計算については、猪股麻紀氏に再計算いただいた。

(12)——トマチン出土土器の年代観については、新里貴之氏によれば、土器附着炭化物の年代は炭素含有率が3%以下なので、土器の土の年代等が寄与している可能性が高く、参考程度としておくのが適当と指摘する(新

里貴之私信)。

(13)——このような特徴は典型的な大当原式とはやや異なり、やんばるの浜屋原式に近似する。やんばるの浜屋原式は表裏面有文土器として紹介した土器群〔宮城1998〕と奄美地域の沈線文脚台系土器の並行関係から、総じて弥生時代後期に並行する可能性が高く、平安山原B遺跡の図21-4が全形の窺える好資料であることから、位置付けについては幅を持たせ今後の検討課題とした。

## 参考文献

- 安里嗣淳・岸本義彦・ほか 1985:『伊江島貝志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集 沖縄県教育委員会  
安座間充 2014:「貝塚時代後1期・沖縄諸島の土器動態」『琉球列島・先史原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第1集】』六一書房 pp.157-172  
伊藤慎二 1994:「沖縄編年の現状と諸問題」『史学研究集録』19 國學院大學大学院日本史学専攻大学院会  
大城剛 1992:「貝志川市宇堅貝塚出土の土器」沖縄考古学会・鹿児島考古学会第3回合同研究会テーマ『弥生土器』合同研究会実行委員会 pp.7-22  
片桐千亜紀・久貝弥嗣・ほか 2006:『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告第35集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
川口雅之 2019:「大隅諸島上能式土器の年代及び兼久式整理の背景について」『中山清美と奄美学—中山清美氏追悼論集—』奄美考古学会 pp.83-110  
岸本義彦 2006:「沖縄諸島貝塚時代後期の尖底土器と平底土器—遺跡における水平分布と垂直分布」『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部 pp.153-156  
岸本義彦・島袋洋・ほか 1982:『古座間味貝塚 範囲確認調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第43集 沖縄県教育委員会  
岸本義彦・島袋春美・ほか 1986:『貝志堅貝塚 発掘調査報告』本部町文化財調査報告書第3集 本部町教育委員会  
岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000:「沖縄編後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化—高宮廣衛先生古稀記念論集—』(上巻)高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 pp.131-152  
木下尚子 2021:「貝殻集積からみた先史時代の貝交易—2018年度の炭素14年代測定結果をもとに—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集 pp.213-246  
金武正紀・盛本勲・ほか 1979:『恩納村熱田第2貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会  
金武正紀・岸本義彦・ほか 1981:『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書第40集 沖縄県教育委員会  
栗島義明 2020:「オオツタノハ製貝輪を巡る諸問題」『考古学集刊』第16号 明治大学文学部考古学研究室 pp.44-66  
黒住耐二 2011:「琉球先史時代人とサンゴ礁資源—貝類を中心に—」『先史・原史時代の琉球列島〜ヒトと景観〜』六一書房 pp.87-107  
佐藤由紀男(編) 2015:『弥生土器』(考古調査ハンドブック12)ニューサイエンス社  
島袋洋・金城亀信・ほか1996『平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区内倉庫建設に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会  
下地安広 1999:「沖縄県嘉門貝塚出土の楽浪系土器」『人類史研究』第11号 人類史研究会 pp.17-24  
新里貴之 2004:「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』12〈貝塚後期文化〉小学館 pp.203-212  
新里貴之 2015:「沖縄・奄美」『弥生土器』(考古調査ハンドブック12)ニューサイエンス社 pp.96-119  
新里貴之(編) 2013:『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学  
高梨修 1993:「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基本方針」『法政考古』第20集 法政考古学会 pp.167-179  
高梨修 2005:『ヤコウガイの考古学』(ものが語る歴史10)同成社

- 高宮廣衛 1993:「昆布貝塚表採の粗隆文土器」『九州上代文化論集:乙益重隆先生古希記念論文集』乙益重隆先生古希記念論集刊行会 pp.117-138
- 高宮廣衛・中村愿・ほか 1989:『沖国大考古』第10号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- 高宮廣衛・中村愿・ほか 1999:『沖国大考古』第12号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- 高宮広土・ほか 2014:『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究』六一書房
- 宮眞嗣一・上原静・ほか 1978:『木綿原—沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書—』読谷村文化財調査報告書第5集 読谷村教育委員会・読谷村歴史民俗資料館
- 宮眞嗣一・上原静・ほか 1980:『大原—久米島大原貝塚群発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第32集 沖縄県教育委員会
- 仲宗根求 1992:「沖縄県中頭郡読谷村渡慶次中川原遺跡」『日本考古学年報』43(1990年度版) 日本考古学協会 pp.630-631
- 仲宗根求 1993:「企画展 砂丘は語る—一字座・渡慶次・儀間・高志保の海岸遺跡—」『資料館だより』No.27 読谷村歴史資料館
- 名島弥生 2014:「放射性炭素年代から見た琉球列島における考古学的時代区分の現状と課題」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品』六一書房 pp.241-260
- 名島弥生・安斎英介・宮城弘樹 2008:「琉球列島における考古学的時代区分と放射性炭素年代」『南島考古』27 沖縄考古学会 pp.23-48
- 西本豊弘(編) 2009:『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』国立歴史民俗博物館
- 藤尾慎一郎 2020:「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」『歴博』218 国立歴史民俗博物館 pp.7-10
- 藤尾慎一郎・木下尚子・ほか 2020:「考古学データによるヤポネシアの歴史の解明」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集 pp.111-338
- 松川章・下地安広・ほか 1991:『嘉門貝塚 A』浦添市文化財調査報告書第18集 浦添市教育委員会 浦添市教育委員会
- 松川章・下地安広・ほか 1993:『嘉門貝塚 B』浦添市文化財調査報告書第21集 浦添市教育委員会
- 宮城伸一・東當美和・ほか 2005:『津堅貝塚—中城湾(アギ浜地区)港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告—』勝連町の文化財第23集 勝連町教育委員会
- 宮城弘樹 1998:「沖縄貝塚時代後期土器の研究(Ⅰ)—一部瀬名貝塚出土表裏面有文土器に着目して—」『あじま』8 名護博物館 pp.41-54
- 宮城弘樹 2005:「沖縄貝塚時代後期土器の研究(Ⅲ)—浜屋原式土器とその概念整理—」『廣友会誌』創刊号 廣友会 pp.13-26
- 宮城弘樹 2009:「沖縄貝塚時代後期土器の研究(Ⅳ)—大当原式土器とその概念整理—」『廣友会誌』第5号 廣友会 pp.19-34
- 宮城弘樹 2014:「貿易陶磁器出現期の琉球列島における土器文化」『琉球列島・先史原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第1集】』六一書房 pp.199-214
- 宮城弘樹・安座間充 2013:「沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器」『ナガラ原東貝塚の研究—5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島』熊本大学 pp.231-247
- 盛本勲・安座間充・ほか 2005:『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書第8集 本部町教育委員会
- 山城安生・東門研治・ほか 2012:『小堀原遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業—』北谷町教育委員会文化財調査報告書第34集 北谷町教育委員会
- 山城安生・東門研治・ほか 2013:『伊礼原 D 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成18・19年度)—』北谷町教育委員会文化財調査報告書第35集 北谷町教育委員会
- 山城安生・東門研治・ほか 2014:『伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原 A 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19・20・21年度)—』北谷町教育委員会文化財調査報告書第36集 北谷町教育委員会
- 山城安生・東門研治・ほか 2015:『平安山原 B 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成20・平成21・平成23年度)—』北谷町教育委員会文化財調査報告書第37集 北谷町教育委員会
- 横尾昌樹・太田菜摘美・ほか 2014:『平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区燃料施設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』うるま市文化財調査報告書第22集 うるま市教育委員会

---

(沖縄国際大学総合文化学部)

(2020年12月11日受付, 2021年5月24日審査終了)



---

**A Study of Pottery Chronology in the Late Shellmound Period with Absolute Dates from Radiocarbon Dates of Shells Found in Shell Deposit : A Study on the Late Shellmound Period Pottery VII**

MIYAGI Hiroki

This paper tries to enrich pottery chronology in Okinawa with absolute dates from recent radiocarbon dates of *Strombus* and *Conus* shells found in shell deposits together with sherds of four pottery types, namely Nakabaru, Aharen-ura Lower Layer, Hamayabaru, and Ufudōbaru type. From each shell deposit between one and three shells were dated with the radiocarbon method. In the context of the relation between shell and pottery sherd in the respective deposits, the following dates are given to the pottery types: Nakabaru type was produced and used between the 8th and 5th centuries BC, the Aharen-ura Lower Layer type between the 5th and 2nd centuries BC, the Hamayabaru type between the second half of the 2nd century BC and the 2nd century AD, and the Ufudōbaru type between the 2nd and the 6-7th centuries AD.

key words: Okinawan Shellmound Period, Shell deposits, Radiocarbon dating, Okinawa Islands, Nakabaru type Pottery, Aharen-ura Low Layer type, Pottery Hamayabaru type Pottery, Ufudōbaru type Pottery